

有 価 証 券 報 告 書

第49期 自 平成29年 4 月 1 日
至 平成30年 3 月31日

株式会社コスモスイニシア

東京都港区芝五丁目34番 6 号

(E03938)

目次

頁

表紙

第一部	企業情報	1
第1	企業の概況	1
1.	主要な経営指標等の推移	1
2.	沿革	3
3.	事業の内容	4
4.	関係会社の状況	6
5.	従業員の状況	8
第2	事業の状況	9
1.	経営方針、経営環境及び対処すべき課題等	9
2.	事業等のリスク	10
3.	経営者による財政状態、経営成績及びキャッシュ・フローの状況の分析	12
4.	経営上の重要な契約等	17
5.	研究開発活動	17
第3	設備の状況	18
1.	設備投資等の概要	18
2.	主要な設備の状況	18
3.	設備の新設、除却等の計画	18
第4	提出会社の状況	19
1.	株式等の状況	19
(1)	株式の総数等	19
(2)	新株予約権等の状況	19
(3)	行使価額修正条項付新株予約権付社債券等の行使状況等	19
(4)	発行済株式総数、資本金等の推移	20
(5)	所有者別状況	20
(6)	大株主の状況	21
(7)	議決権の状況	21
2.	自己株式の取得等の状況	22
3.	配当政策	23
4.	株価の推移	23
5.	役員の状況	24
6.	コーポレート・ガバナンスの状況等	28
第5	経理の状況	35
1.	連結財務諸表等	36
(1)	連結財務諸表	36
(2)	その他	62
2.	財務諸表等	63
(1)	財務諸表	63
(2)	主な資産及び負債の内容	72
(3)	その他	72
第6	提出会社の株式事務の概要	73
第7	提出会社の参考情報	74
1.	提出会社の親会社等の情報	74
2.	その他の参考情報	74
第二部	提出会社の保証会社等の情報	75
	〔監査報告書〕	

【表紙】

【提出書類】	有価証券報告書
【根拠条文】	金融商品取引法第24条第1項
【提出先】	関東財務局長
【提出日】	平成30年6月22日
【事業年度】	第49期（自 平成29年4月1日 至 平成30年3月31日）
【会社名】	株式会社コスモスイニシア
【英訳名】	COSMOS INITIA Co., Ltd.
【代表者の役職氏名】	代表取締役社長 高木 嘉幸
【本店の所在の場所】	東京都港区芝五丁目34番6号
【電話番号】	(03) 5444-3220
【事務連絡者氏名】	経理財務部 部長 中崎 健一
【最寄りの連絡場所】	東京都港区芝五丁目34番6号
【電話番号】	(03) 5444-3220
【事務連絡者氏名】	経理財務部 部長 中崎 健一
【縦覧に供する場所】	株式会社東京証券取引所 (東京都中央区日本橋兜町2番1号) 株式会社コスモスイニシア西日本支社 (大阪市北区中崎西二丁目4番12号)

第一部【企業情報】

第1【企業の概況】

1【主要な経営指標等の推移】

(1) 連結経営指標等

回次	第45期	第46期	第47期	第48期	第49期
決算年月	平成26年 3 月	平成27年 3 月	平成28年 3 月	平成29年 3 月	平成30年 3 月
売上高 (百万円)	67,441	75,620	87,022	92,366	100,829
経常利益 (百万円)	1,386	1,351	2,959	3,482	4,367
親会社株主に帰属する当期純利益 (百万円)	1,259	1,735	3,639	3,030	3,695
包括利益 (百万円)	1,308	1,773	3,540	3,011	3,818
純資産額 (百万円)	14,156	15,929	19,470	22,243	25,824
総資産額 (百万円)	70,754	82,794	102,293	110,193	115,309
1株当たり純資産額 (円)	417.49	469.79	574.21	656.02	761.63
1株当たり当期純利益 (円)	41.52	51.18	107.33	89.38	108.98
潜在株式調整後1株当たり当期純利益 (円)	17.03	—	—	—	—
自己資本比率 (%)	20.01	19.24	19.03	20.19	22.40
自己資本利益率 (%)	9.24	11.54	20.56	14.53	15.37
株価収益率 (倍)	10.67	11.88	4.05	4.67	6.79
営業活動によるキャッシュ・フロー (百万円)	△23,682	△5,059	△17,434	1,144	△999
投資活動によるキャッシュ・フロー (百万円)	△229	△137	△1,032	△450	△744
財務活動によるキャッシュ・フロー (百万円)	24,892	9,259	18,201	3,892	△673
現金及び現金同等物の期末残高 (百万円)	9,382	13,438	13,124	17,730	15,342
従業員数 (人)	427	446	490	700	801
(外、平均臨時雇用者数)	(457)	(499)	(517)	(366)	(296)

(注) 1. 上記の金額には消費税及び地方消費税（以下「消費税等」という。）は含まれておりません。

2. 第46期及び第47期の潜在株式調整後1株当たり当期純利益につきましては、希薄化効果を有している潜在株式が存在しないため記載しておりません。第48期及び第49期につきましては潜在株式が存在しないため記載しておりません。

(2) 提出会社の経営指標等

回次	第45期	第46期	第47期	第48期	第49期
決算年月	平成26年 3 月	平成27年 3 月	平成28年 3 月	平成29年 3 月	平成30年 3 月
売上高 (百万円)	55,315	64,332	74,752	78,387	86,779
経常利益 (百万円)	1,332	1,421	2,664	3,091	4,150
当期純利益 (百万円)	1,707	1,883	3,439	2,764	3,593
資本金 (百万円)	5,000	5,000	5,000	5,000	5,000
発行済株式総数					
普通株式 (千株)	33,911	33,911	33,911	33,911	33,911
純資産額 (百万円)	12,973	14,857	18,297	20,824	24,180
総資産額 (百万円)	56,686	69,337	89,105	96,939	101,176
1株当たり純資産額 (円)	382.61	438.16	539.61	614.16	713.13
1株当たり配当額					
普通株式 (円)	—	—	7.00	7.00	9.00
(内 1株当たり中間配当額)	(—)	(—)	(—)	(—)	(—)
1株当たり当期純利益 (円)	56.27	55.55	101.45	81.54	105.98
潜在株式調整後 1株当たり当期純利益 (円)	23.08	—	—	—	—
自己資本比率 (%)	22.89	21.43	20.53	21.48	23.90
自己資本利益率 (%)	13.93	13.54	20.75	14.13	15.97
株価収益率 (倍)	7.87	10.94	4.29	5.11	6.98
配当性向 (%)	—	—	6.90	8.58	8.49
従業員数 (人)	273	283	305	501	519
(外、平均臨時雇用者数)	(167)	(191)	(205)	(34)	(31)

(注) 1. 上記の金額には消費税等は含まれておりません。

2. 第46期及び第47期の潜在株式調整後 1株当たり当期純利益につきましては、希薄化効果を有している潜在株式が存在しないため記載しておりません。第48期及び第49期につきましては潜在株式が存在しないため記載しておりません。

2 【沿革】

年月	事項
昭和44年6月	東京都千代田区に、資本金2百万円をもって株式会社日本リクルート映画社を設立
昭和49年2月	事業目的を不動産事業に変更し、環境開発株式会社に商号変更
昭和49年5月	宅地建物取引業者免許（東京都知事（1）第27494号）を取得し、分譲マンションの販売事業を開始
昭和52年5月	宅地建物取引業者免許（建設大臣（1）第2361号）を取得
昭和52年6月	大阪支社（現西日本支社）を設置し、近畿圏でも分譲マンションの販売事業を開始
昭和60年1月	不動産仲介事業を本格的に開始
昭和60年3月	株式会社リクルートコスモスに商号変更 日環建物株式会社を吸収合併
昭和61年7月	不動産賃貸事業を本格的に開始
昭和61年10月	当社株式を店頭登録
昭和62年3月	株式会社コスモスライフ（現大和ライフネクスト株式会社）の全株式を取得し、不動産管理事業に進出
平成2年1月	株式会社コスモスマア（現連結子会社）を設立し、リフォーム等工事業を開始
平成2年4月	一級建築士事務所を設置
平成2年9月	オーストラリア・クイーンズランド州・ブリスベン市に、Cosmos Australia Pty Ltd（現連結子会社）を設立し、海外ホテル・リゾート運営事業に着手
平成8年4月	戸建住宅の販売事業を本格的に開始
平成10年10月	お客さま相談窓口「コスモスホットライン」を設置
平成16年12月	日本証券業協会への店頭登録を取消し、ジャスダック証券取引所に株式を上場
平成17年6月	MBO（マネジメント・バイアウト）の手法により、リクルートグループから独立
平成18年9月	株式会社コスモスイニシアに商号変更、東京都千代田区に本社移転
平成21年7月	首都圏各支社（横浜支社・北関東支社・千葉支社）を統合し、本社に集約
平成21年9月	株式会社コスモスライフの全株式を大和ハウス工業株式会社へ譲渡
平成22年10月	ジャスダック証券取引所と大阪証券取引所の合併に伴い、大阪証券取引所JASDAQに上場
平成23年1月	分譲マンション累計供給戸数が10万戸を突破
平成23年7月	東京都港区に本社移転
平成25年6月	大和ハウス工業株式会社と資本業務提携契約を締結し、大和ハウスグループ会社となる
平成25年7月	東京証券取引所と大阪証券取引所の統合に伴い、東京証券取引所JASDAQ（スタンダード）に上場
平成26年10月	株式会社コスモスライフサポート（現連結子会社）を設立
平成28年5月	中期経営計画2018を策定
平成28年12月	Cosmos Australia Holdings Pty Ltd（現連結子会社）を設立
平成29年10月	株式会社コスモスホテルマネジメント（現連結子会社）を設立
平成29年12月	株式会社WOOOと資本業務提携契約を締結
平成30年3月	Cosmos Australia Pty Ltdが保有するKBRV Resort Operations Pty Ltdの全株式を譲渡し、海外ホテル・リゾート運営事業から撤退

3【事業の内容】

当社グループは、当社及び子会社11社並びに関連会社2社により構成されており、事業はレジデンシャル事業、ソリューション事業、工事事業、海外事業及びこれらに附随する事業を行っております。

当社グループが営む主な事業内容、各関係会社等の当該事業における位置付け及びセグメントとの関係は以下のとおりであります。

次の5事業は「第5 経理の状況 1 連結財務諸表等 (1) 連結財務諸表 注記事項」に掲げる報告セグメントの区分と同一であります。

(1) レジデンシャル事業（当社）

・新築マンション販売

当社は、「イニシアシリーズ」等の新築マンション販売、「ザ・ロアハウスシリーズ」のタウンハウス販売を行っております。

・新築一戸建販売

当社は、「コスモアベニューシリーズ」等の新築一戸建販売を行っております。

・リノベーションマンション販売

当社は、「リノマークスシリーズ」等のリノベーションマンション販売、中古マンションの買取再販（リニューアル）を行っております。

・リテール仲介

当社は、買い替え等の中古物件需要に対するマンションの仲介を行っております。

(2) ソリューション事業（当社及び株式会社コスモスホテルマネジメント）

・不動産賃貸

当社は、マンション及びオフィスビル等の転貸（サブリース）等を行っております。

・投資用不動産販売

当社は、「コスモリードシリーズ」の投資用マンション販売、「リードシーシリーズ」の投資用オフィスビル販売を行っております。

連結子会社の株式会社コスモスホテルマネジメントは、「MIMARUシリーズ」のホテル運営を行っております。

・法人仲介

当社は、マンション及び事業用地等の土地・建物の仲介、並びに不動産に関するコンサルティング等を行っております。

(3) 工事事業（株式会社コスモスモア）

連結子会社の株式会社コスモスモアは、マンションギャラリー設営、インテリア販売、オフィス移転改修、スチールハウス建設等を行っております。

(4) 海外事業（Cosmos Australia Pty Ltd及び子会社7社：会社総数8社）

連結子会社のCosmos Australia Pty Ltd及びその子会社6社並びにCosmos Australia Holdings Pty Ltdは、オーストラリア国内における不動産関連の事業等を行っております。

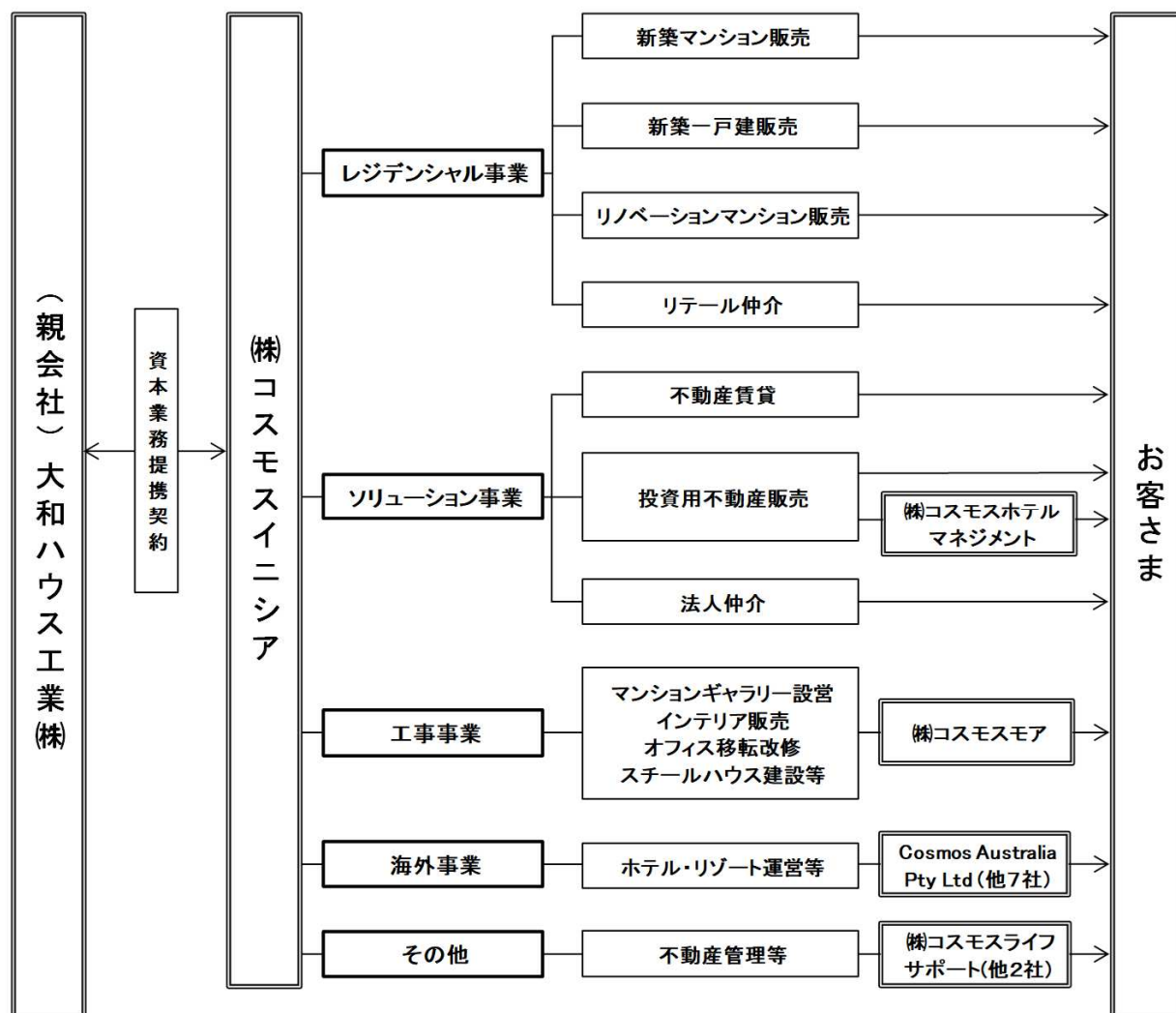
なお、平成30年3月26日付にてCosmos Australia Pty Ltdが所有するKBRV Resort Operations Pty Ltdの全株式を譲渡したことにより、同社及びその子会社KBRV Services Pty Ltdは連結子会社でなくなっております。

(5) その他（株式会社コスモスライフサポート、関連会社2社：会社総数3社）

連結子会社の株式会社コスモスライフサポートは、不動産の管理業務等を行っております。

(事業系統図)

主な関係会社の事業の内容を図示すると次のとおりであります。



4 【関係会社の状況】

名称	住所	資本金 (百万円)	主要な事業の 内容	議決権の所有割合 又は被所有割合 (%)	関係内容
(親会社) 大和ハウス工業株式会社 (注) 2	大阪市北区	161,699	戸建住宅 賃貸住宅 マンション 住宅ストック 商業施設 事業施設 その他	被所有 64.1 (0.9)	当社の筆頭株主であり、資本業務 提携契約を締結している 同社が設立した子会社であるDaiwa House Australia Finance Pty Ltd は、当社の連結子会社であるCA Finance Pty Ltdへ貸付を行っている 当社への役員派遣 2名
(連結子会社) 株式会社コスモスモア (注) 7	東京都港区	90	工事業業	100	当社のマンションギャラリーの設 営等を行っている 役員の兼任 1名
株式会社コスモスホテルマネジ メント (注) 5	東京都港区	90	ソリューション事業	100	当社と不動産賃貸借契約を締結し ている
株式会社コスモスライフサポート	東京都港区	95	その他	100	なし
Cosmos Australia Pty Ltd (注) 3	オーストラリア クイーンズランド州 ブリスベン市	百万豪ドル 110	海外事業	100	当社より資金の貸付を行っている 役員の兼任 1名
CA Finance Pty Ltd (注) 6	オーストラリア クイーンズランド州 ブリスベン市	百万豪ドル 1	同上	100 (100)	親会社が設立した子会社である Daiwa House Australia Finance Pty Ltdを通じて融資を受けてお り、当社は債務保証を行っている 役員の兼任 1名
CA Asset Management Pty Ltd (注) 6	オーストラリア クイーンズランド州 ブリスベン市	百万豪ドル 0	同上	100 (100)	役員の兼任 1名
CA Summer Hill Pty Ltd (注) 6	オーストラリア クイーンズランド州 ブリスベン市	百万豪ドル 3	同上	100 (100)	なし
CA Drummoyne Pty Ltd (注) 6	オーストラリア クイーンズランド州 ブリスベン市	百万豪ドル 4	同上	100 (100)	なし
KBRV Resort Operations Pty Ltd (注) 6	オーストラリア クイーンズランド州 ブリスベン市	百万豪ドル 13	同上	100 (100)	役員の兼任 1名
KBRV Services Pty Ltd (注) 6	オーストラリア クイーンズランド州 ブリスベン市	百万豪ドル 0	同上	100 (100)	なし
Cosmos Australia Holdings Pty Ltd	オーストラリア クイーンズランド州 ブリスベン市	百万豪ドル 2	同上	100	役員の兼任 1名

名称	住所	資本金 (百万円)	主要な事業の 内容	議決権の所有割合 又は被所有割合 (%)	関係内容
(持分法適用関連会社) 大和コスモスコンストラクション 株式会社	東京都港区	490	マンションの 大規模修繕工 事業	40	役員の兼任 1名

- (注) 1. 連結子会社に関する主要な事業の内容には、セグメントの名称を記載しております。
2. 有価証券報告書を提出しております。
3. Cosmos Australia Pty Ltd は特定子会社に該当しております。
4. 議決権の所有割合又は被所有割合の()内は、間接(被)所有割合であり、内数で記載しております。
5. 平成29年10月11日付にて、株式会社コスモスホテルマネジメントを新たに設立し連結子会社としております。
6. CA Finance Pty Ltd、CA Asset Management Pty Ltd、CA Summer Hill Pty Ltd、CA Drummoyne Pty Ltd 及びKBRV Resort Operations Pty Ltdは Cosmos Australia Pty Ltd の100%子会社であり、またKBRV Services Pty LtdはKBRV Resort Operations Pty Ltdの100%子会社であります。なお、平成30年3月26日付にてKBRV Resort Operations Pty Ltd の全株式を譲渡したことにより、同社及びその子会社 KBRV Services Pty Ltdは連結子会社でなくなっております。
7. 株式会社コスモスモアについては、売上高(連結会社相互間の内部売上高を除く。)の連結売上高に占める割合が10%を超えております。
- 主要な損益情報等
- | | |
|-----------|-----------|
| (1) 売上高 | 10,406百万円 |
| (2) 経常利益 | 74百万円 |
| (3) 当期純利益 | 52百万円 |
| (4) 純資産額 | 2,280百万円 |
| (5) 総資産額 | 4,056百万円 |

5 【従業員の状況】

(1) 連結会社の状況

平成30年3月31日現在

セグメントの名称	従業員数(人)
レジデンシャル事業	255 (26)
ソリューション事業	192 (3)
工事業	168 (37)
海外事業	105 (216)
報告セグメント計	720 (282)
その他	7 (10)
全社（共通）	74 (4)
合計	801 (296)

- (注) 1. 上記従業員数は就業人員であり、臨時従業員数は（ ）内に年間の平均人員を外書きで記載しております。
2. 当連結会計年度に従業員数が増加し、臨時従業員数が減少した主な理由は、株式会社コスモスモアにおいて有期雇用契約社員を対象に、無期雇用への転換を行ったことによるものであります。
3. 在外連結子会社の従業員数については、平成29年12月末日時点の従業員数を記載しております。
4. 全社（共通）として記載している従業員数は、特定のセグメントに区分できない管理部門に所属しているものであります。

(2) 提出会社の状況

平成30年3月31日現在

従業員数(人)	平均年齢(歳)	平均勤続年数(年)	平均年間給与(円)
519 (31)	37.6	10.0	6,773,755

セグメントの名称	従業員数(人)
レジデンシャル事業	255 (26)
ソリューション事業	190 (1)
全社（共通）	74 (4)
合計	519 (31)

- (注) 1. 上記従業員数は就業人員であり、臨時従業員数は（ ）内に年間の平均人員を外書きで記載しております。なお、兼務役員は含まれておりません。
2. 平均年間給与（税込）は、時間外手当その他の基準外賃金及び賞与が含まれております。
3. 全社（共通）として記載している従業員数は、特定のセグメントに区分できない管理部門に所属しているものであります。

(3) 労働組合の状況

労働組合は結成されておませんが、労使関係は円満に推移しております。

第2【事業の状況】

1【経営方針、経営環境及び対処すべき課題等】

文中の将来に関する事項は、当連結会計年度末現在において当社グループが判断したものであります。

(1) 会社の経営の基本方針

当社は、昭和49年に創業し、これまでに10万戸を超える新築マンションをはじめ、新築一戸建やリノベーションマンションを供給する等、商品・サービスの提供を通じて「すべての判断の軸をお客さまに置き、住まいに関する様々なご要望に総合的に応えたい。」という想いを培ってまいりました。

そして、企業理念として「Next Value For The Customer」を掲げ、今後もお客さまの求める次の価値を創り出すことに真摯に取り組むとともに、多様化・変化するお客さまニーズに対応した商品の提供を通じて、より良い都市生活環境の創造に取り組んでまいります。

(2) 中長期的な会社の経営戦略、目標とする経営指標及び対処すべき課題

今後の日本経済は、引き続き緩やかな回復基調が継続し、企業収益並びに雇用・所得環境の改善が期待されますが、世界的な政治情勢と経済動向についてはさまざまなリスク要因があり、先行きの見通しには不透明感がある状況と考えております。

不動産市場におきましては、不動産ストックの増加が進む一方、世帯構成の変化・少子高齢化・訪日観光客の増加や資産運用への関心の高まり等不動産に対するニーズが益々多様化しており、従来の新築分譲住宅の開発に加え、投資用不動産やホテルの開発・運営、不動産ストックの活用・再生、不動産オーナーの資産運用コンサルティングなど、不動産関連ビジネスを多面的に展開することで当社の成長を目指す必要があると考えております。

このような事業環境のもと、当社は、「中期経営計画2018」に定めた基本方針に則り、よりよい都市生活環境の実現を目指し、次の価値を創造し続けてまいります。

また、今後も商品・サービスを通じて社会課題を解決するため、CSVビジョン『Next GOOD「よい暮らし」「よい社会」の次のこたえを。』求める取り組みをお客さま・社会と共に創ってまいります。

<「中期経営計画2018」における基本方針>

- 経営基盤の強化
- 成長戦略のさらなる実践
 - 多様化するニーズに対応する商品・サービス展開
 - 事業ポートフォリオの変革の推進

■レジデンシャル事業

- ・新築分譲の深耕・中古ストック再生の強化拡大・リノベーション工事・入居後サービス拡張
→お客さまに豊富な選択メニュー／サービスを提供
- ・アクティブシニア向け住宅供給・入居後サービスを進化・拡張
- ・大和ハウスグループと連携した建替え・再開発事業への取り組み

■ソリューション事業

- ・プロのコンサルタント集団として、事業用不動産に関するあらゆるソリューションをワンストップで提供
- ・投資用不動産開発に加え、中古ストック再生を強化拡大

■工事・海外・新規事業

- ・工事業強化
既存事業の拡張に加え、「大規模修繕工事」強化
- ・大和ハウスグループと連携したオーストラリアでの住宅開発継続
- ・インバウンド宿泊需要に対応した新規ビジネス展開

<「中期経営計画2018」における目標とする経営指標>

中期経営計画において目標とする経営指標は以下のとおりであります。

(単位：百万円)

	平成29年3月期	平成30年3月期	平成31年3月期	中期経営計画期間累計
売上高	90,000	98,000	105,000	293,000
営業利益	3,700	4,400	5,000	13,100

(注) 平成30年3月期の中期経営計画は、平成29年5月10日付公表の業績予想となります。

2【事業等のリスク】

以下において、当社グループの事業展開に関するリスク要因となる可能性があると考えられる主な事項及びその他の重要と考えられる事項を記載しております。また、必ずしもそのようなリスク要因に該当しない事項についても、投資判断、あるいは当社グループの事業活動を理解する上で、重要と考えられる事項については、投資者に対する積極的な情報開示の観点から記載しております。

なお、当社グループは、これらのリスク発生の可能性を認識した上で、発生の回避に努め、また、発生した場合には、その影響を最小限にとどめるよう対応に努めていく方針であります。当社株式に関する投資判断は、本項及び本書中の本項目以外の記載も併せて、慎重に検討した上で行われる必要があると考えております。また、以下の記載は当社株式への投資に関連するリスクを全て網羅するものではありませんので、この点にご留意下さい。

本項における将来に関する事項は、この有価証券報告書提出日（平成30年6月22日）現在において当社グループが判断したものであります。

（1）不動産市況、金利動向及び税制等について

当社グループの主要事業である不動産事業は、景気動向、金利動向、地価動向、新規供給動向及び不動産に係る税制等の影響を受けやすいため、景気の悪化や大幅な金利上昇、新規大量供給による販売価格の下落など経済情勢に変化があった場合には、お客さまの購入意欲を減退させる可能性があり、その場合には、当社グループの業績に影響を及ぼす可能性があります。また、上記経済情勢の変化は、事業用地の仕入価格の変動要因にもなり、今後、事業用地の仕入れが計画どおりに進まない場合には、当社グループの業績に影響を及ぼす可能性があります。

当社グループの主要事業である不動産事業は、主に建設業者との間において工事請負契約を締結し、建物の建設工事を行っており、特定会社への依存関係はございませんが、建設業者の資材・部材の調達において、国内外の経済情勢等の影響により、価格高騰などの問題が発生した場合、当社の建築費上昇という結果をもたらす可能性があり、その場合には、当社グループの業績に影響を及ぼす可能性があります。

（2）物件の引渡時期等による業績の変動について

当社グループの主要事業である不動産事業においては、顧客への引渡時に売上高を計上しておりますが、引渡時期につきましては、一般的に転勤及び学期末の時期であることなどの理由により、2～3月頃に集中することが多くなるため、第4四半期連結会計期間の売上高が他の四半期連結会計期間と比べ高くなる傾向があります。

従いまして、天災、事故、その他予測し得ない要因等の不測の事態により、物件の引渡時期が期末を越える遅延が生じた場合、また、期末近くに竣工・引渡を計画している物件について、顧客への引渡が次期にずれ込む事態が生じた場合には、当該期の当社グループの業績に影響を及ぼす可能性があります。

（3）有利子負債への依存について

当社グループは、不動産事業における事業用地の取得資金及び建築費の一部を、主に金融機関等からの借入金により調達しており、有利子負債への依存度が高い水準にあることから、現行の金利水準が大幅に変動した場合には、当社グループの業績及び財政状態に影響を及ぼす可能性があります。

（4）瑕疵担保責任について

当社は、独自に「標準仕様書」「品質管理基準」を定めるとともに、新築マンションにおいては設計段階から建設工事・建物竣工に至る各過程での重要なポイントを各現場で専任スタッフが検査・確認し、一貫した品質管理を体系的に行うQITを展開するなど、高品質な住宅づくりに努めております。

また、アフターサービスの充実を図るため、建物竣工後2～3ヶ月間、新築マンション内に工事関係者の職員が駐在し、入居されたお客さまからのご要望、各種手直し、修繕などスピーディーな対応を行っております。

しかしながら、建物竣工後、ある一定期間内において、設計・施工上の問題等に起因する瑕疵など、不具合が生じた場合は、間接損害を含め、不具合が原因で生じた損害に対する責任として、損害賠償等による費用発生、又は当社の商品・サービスに対する信用の失墜による売上高の減少などの可能性も考えられ、その場合には、当社グループの業績に影響を及ぼす可能性があります。

(5) 協力会社への依存について

当社グループの提供する商品及びサービスにおいて、当社グループの従業員等が直接実施する場合を除いては、戸建建築、モデルルーム工事等の業務を所定の審査を経て登録した協力会社へ発注しております。

当社グループといたしましては、協力会社が行う業務はそのまま当社評価にも通じるものであることから、日頃より良好なコミュニケーションを図るとともに、定期的に技術・ノウハウの共有に努めております。

しかしながら、協力会社の予期せぬ業績不振や事故等により事業継続できなくなるなどの不測の事態が発生した場合は、代替措置に伴う追加の費用発生やサービス提供が遅延する可能性も考えられ、その場合には、当社グループの業績に影響を及ぼす可能性があります。

(6) 個人情報の管理について

当社グループは、事業展開するにあたり、新築マンション及び戸建住宅をご購入いただいたお客さま等、もしくはご検討いただいたお客さま等の個人情報をお預かりしており、「個人情報の保護に関する法律」に定められる個人情報取扱事業者であります。

当社グループといたしましては、情報管理に関する規程等の整備・個人情報保護方針（プライバシーポリシー）の制定を行うとともに、社員教育システムの運用・オフィス入退館システムの導入など、情報管理全般にわたる体制強化を図っております。

しかしながら、不測の事態により、万が一、個人情報が外部へ漏洩するような事態となった場合は、当社グループの信用失墜による売上高の減少、又は損害賠償による費用発生等の可能性も考えられ、その場合には、当社グループの業績に影響を及ぼす可能性があります。

(7) 法的規制等について

当社グループが事業展開するにあたり、以下の法的規制等を受けております。

- ・不動産業は、「宅地建物取引業法」「国土利用計画法」「建築基準法」「都市計画法」「住宅の品質確保の促進等に関する法律」「不動産特定共同事業法」「土壌汚染対策法」「犯罪による収益の移転防止に関する法律」などの法的規制等を受けております。当社は不動産業者として、「宅地建物取引業法」に基づく免許を受け、事業展開しております。
- ・建設業は、「建設業法」「建築士法」「建設工事に係る資材の再資源化等に関する法律」「労働安全衛生法」などの法的規制等を受けております。当社及び当社の連結子会社である株式会社コスモスモアは、建設業者として、「建設業法」に基づく許可を受け、事業展開しております。

今後、これらの規制の改廃や新たな法的規制等が設けられる場合には、当社グループの事業活動が制限を受ける可能性があります、その場合には、当社グループの業績に影響を及ぼす可能性があります。

(8) 海外事業について

当社の連結子会社であるCosmos Australia Pty Ltd 及びその子会社4社は、オーストラリア・クイーンズランド州にある世界遺産に認定されているフレーザー島内において、ホテル・リゾート運営を中心に事業展開してまいりましたが、当該事業から撤退する方針であることから、将来の撤退に伴う損失見込額につきましては、既に必要な会計処理を行っております。

また、平成30年3月26日付にてKBRV Resort Operations Pty Ltdの全株式を譲渡したこと等により、海外事業におけるホテル・リゾート運営事業からの撤退が完了いたしました。本株式譲渡に伴う海外事業におけるホテル・リゾート運営事業撤退による損益影響は、現在精査中ではありますが、重要な損益は発生しないと判断しております。

(9) 保有不動産の価格、収益性の変動について

当社グループは、事業遂行上必要な販売用不動産及び事業用不動産を保有しております。このため、不動産市況の動向その他の要因により不動産価格が下落した場合には、評価損や売却損が発生する可能性があります、当社グループの業績及び財政状態に影響を及ぼす可能性があります。

(10) 当社の筆頭株主及び親会社について

当社の筆頭株主及び親会社は、大和ハウス工業株式会社であり、同社は、当社の発行済株式総数の63.19%を保有しており、当社の経営について重大な影響を及ぼす可能性があります、当社の経営方針についての考え方や同社の利害が、当社の他の株主と常に一致するとの保証はなく、当社グループの経営方針についての考え方及び同社による当社株式に係る議決権行使等により、当社グループの事業運営に影響を及ぼす可能性があります、これらの結果、当社グループの業績に影響を与える可能性があります。

3【経営者による財政状態、経営成績及びキャッシュ・フローの状況の分析】

(1) 経営成績等の状況の概要

当連結会計年度における当社グループの財政状態、経営成績及びキャッシュ・フロー（以下「経営成績等」という。）の状況の概要は次のとおりであります。

①財政状態及び経営成績の状況

当連結会計年度のわが国経済は、米国の政治経済動向や朝鮮半島情勢等の先行きが懸念されましたが、雇用状況や企業業績の改善等により緩やかな景気回復基調が継続しました。

平成29年の不動産業界におきましては、新築マンション市場では、首都圏の発売戸数は35,898戸（前年比0.4%増）と4年ぶりに前年を上回り、平均価格は首都圏全エリアにて上昇し5,908万円（同7.6%増）、初月契約率は68.1%（同0.7ポイント減）となりました。また、近畿圏の発売戸数は19,560戸（同4.7%増）となり、平均価格は3,836万円（同2.1%減）、初月契約率は76.1%（同4.2ポイント増）と堅調に推移いたしました。

マンション流通市場では、首都圏の中古マンション成約件数は37,329件（同0.4%増）と前年に続き過去最高を更新、成約単価・成約価格も5年連続の上昇となりました。また、近畿圏の成約件数は、ほぼ前年並の17,201件（同0.2%増）、成約単価・成約価格の上昇傾向が継続いたしました。

不動産投資市場におきましては、取引価格が上昇し、利回りは低下基調となりましたが、良好な資金調達環境の継続を背景に、オフィス・住宅のほか、ホテル・物流・ヘルスケア施設などへの投資意欲は底堅く推移いたしました。

このような事業環境におきまして、当社は、今後の経営基盤の強化と成長戦略のさらなる実践を主要テーマに掲げた「中期経営計画2018」の基本方針に則り、各事業への取り組みを推進してまいりました。

この結果、当連結会計年度の経営成績等は以下のとおりであります。

財政状態

当連結会計年度末の総資産は1,153億9百万円となり、前連結会計年度末比51億16百万円増加いたしました。

当連結会計年度末の負債合計は894億84百万円となり、前連結会計年度末比15億35百万円増加いたしました。

当連結会計年度末の純資産は258億24百万円となり、前連結会計年度末比35億80百万円増加いたしました。

（単位：百万円）

	平成29年3月期	平成30年3月期	前連結会計年度末比
総資産	110,193	115,309	5,116
総負債	87,949	89,484	1,535
純資産	22,243	25,824	3,580
自己資本比率（%）	20.2	22.4	2.2

経営成績

当連結会計年度の経営成績は、前連結会計年度と比較して、レジデンシャル事業及び工事事業において減収減益となった一方で、ソリューション事業及び海外事業において増収増益となったこと等により、売上高1,008億29百万円（前連結会計年度比9.2%増）、営業利益48億69百万円（同19.2%増）、経常利益43億67百万円（同25.4%増）、親会社株主に帰属する当期純利益36億95百万円（同21.9%増）を計上し、連結業績予想を上回る実績となりました。

（単位：百万円）

	平成29年3月期	平成30年3月期	前連結会計年度比	連結業績予想	連結業績予想比
売上高	92,366	100,829	8,463	98,000	2,829
売上総利益	18,516	19,487	970	19,300	187
販売費及び一般管理費	14,432	14,618	185	14,900	△281
営業利益	4,084	4,869	785	4,400	469
経常利益	3,482	4,367	885	3,900	467
親会社株主に帰属する当期純利益	3,030	3,695	664	3,300	395

報告セグメントの業績は以下のとおりであります。

なお、各セグメントの売上高はセグメント間の内部売上高又は振替高を含んでおり、セグメント損益は営業損益ベースの数値であります。

a. レジデンシャル事業

レジデンシャル事業におきましては、新築マンションの引渡戸数が前連結会計年度比186戸減少したこと等により、売上高391億29百万円（前連結会計年度比21.6%減）、セグメント利益11億42百万円（同46.3%減）を計上いたしました。

<レジデンシャル事業の業績>

（単位：百万円）

	平成29年3月期	平成30年3月期	前連結会計年度比	増減率(%)
売上高	49,884	39,129	△10,755	△21.6
セグメント利益	2,128	1,142	△985	△46.3

<売上高の内訳>

（単位：百万円）

	平成29年3月期		平成30年3月期		前連結会計年度比	
	販売数量	売上高	販売数量	売上高	販売数量	売上高
新築マンション（戸）	744	33,266	558	24,948	△186	△8,318
新築一戸建（区画）	68	4,817	55	4,717	△13	△100
リノベーションマンション等	—	11,030	—	8,661	—	△2,369
（うち中古マンション買取再販）（戸）	(317)	(10,477)	(214)	(8,156)	(△103)	(△2,320)
リテール仲介等（取扱高）	18,300	769	13,736	802	△4,564	32
合計	—	49,884	—	39,129	—	△10,755

※新築マンションにはタウンハウス、新築一戸建には宅地分譲を含んでおります。

※共同事業物件における戸数及び区画数については、事業比率に基づき計算しております。

<契約の状況>

（単位：百万円）

	平成29年3月期		平成30年3月期		前連結会計年度比		
	契約数量	売上高	契約数量	売上高	契約数量	売上高	増減率(%)
新築マンション（戸）	629	27,714	598	27,939	△31	225	0.8
新築一戸建（区画）	71	4,999	54	4,711	△17	△288	△5.8
中古マンション（戸）	326	10,917	199	7,516	△127	△3,401	△31.2

<売上総利益率>

	平成29年3月期(%)	平成30年3月期(%)	前連結会計年度比
新築マンション	19.3	16.7	△2.6
新築一戸建	11.8	16.5	4.7
中古マンション	10.0	12.5	2.5

※売上総利益率の算出に際し、たな卸資産評価損は含めておりません。

<完成在庫>

（平成30年3月31日現在）

		平成29年3月期	平成30年3月期	前連結会計年度比
新築マンション（戸）	完成在庫	144	161	17
	（うち未契約完成在庫）	(128)	(133)	(5)
新築一戸建（区画）	完成在庫	24	30	6
	（うち未契約完成在庫）	(19)	(25)	(6)

b. ソリューション事業

ソリューション事業におきましては、マンションのサブリースにおける空室率が前連結会計年度比0.4ポイント改善の2.5%となり、投資用不動産等の引渡棟数が増加したこと等により、売上高476億71百万円（同67.3%増）、セグメント利益48億62百万円（同73.7%増）を計上いたしました。

<ソリューション事業の業績>

（単位：百万円）

	平成29年3月期	平成30年3月期	前連結会計年度比	増減率(%)
売上高	28,502	47,671	19,168	67.3
セグメント利益	2,799	4,862	2,062	73.7

<売上高の内訳>

（単位：百万円）

	平成29年3月期		平成30年3月期		前連結会計年度比	
	転貸／ 販売数量	売上高	転貸／ 販売数量	売上高	転貸／ 販売数量	売上高
不動産サブリース（戸）	9,352	13,849	9,520	14,507	168	657
投資用不動産等	—	14,087	—	32,381	—	18,294
（うち一棟物件）（棟）	(15)	(11,078)	(20)	(25,141)	(5)	(14,063)
法人仲介等（取扱高）	20,384	565	23,397	782	3,012	216
合計	—	28,502	—	47,671	—	19,168

※投資用不動産等には、ホテル運営収入、賃料収入及び土地売却を含んでおります。

<売上総利益率>

	平成29年3月期（%）	平成30年3月期（%）	前連結会計年度比
投資用不動産等	13.3	14.6	1.3

※投資用不動産等のうち、一棟物件の売上総利益率となります。

c. 工事業業

工事業業におきましては、オフィス改修工事の受注が減少したこと、売上総利益率が低下したこと等により、売上高104億6百万円（同5.0%減）、セグメント利益71百万円（同80.3%減）を計上いたしました。

<工事業業の業績>

（単位：百万円）

	平成29年3月期	平成30年3月期	前連結会計年度比	増減率(%)
売上高	10,953	10,406	△547	△5.0
セグメント利益	360	71	△289	△80.3

d. 海外事業

海外事業におきましては、オーストラリアにおけるホテル・リゾート運営事業の業績が概ね順調に推移したこと等により、売上高43億28百万円（同7.3%増）、セグメント利益3億67百万円（同20.0%増）を計上いたしました。

<海外事業の業績>

（単位：百万円）

	平成29年3月期	平成30年3月期	前連結会計年度比	増減率(%)
売上高	4,032	4,328	295	7.3
セグメント利益	305	367	61	20.0

②キャッシュ・フローの状況

当連結会計年度末における現金及び現金同等物（以下「資金」という。）は153億42百万円となりました。

〔前連結会計年度末は177億30百万円〕

（営業活動によるキャッシュ・フロー）

主に税金等調整前当期純利益を43億40百万円計上した一方で、たな卸資産の増加が40億18百万円あったこと、売上債権の増加が15億43百万円あったことから、9億99百万円の資金の減少となりました。〔前連結会計年度は11億44百万円の増加〕

（投資活動によるキャッシュ・フロー）

主に有形固定資産の取得による支出が2億62百万円あったこと、投資有価証券の取得による支出が4億73百万円あったことから、7億44百万円の資金の減少となりました。〔前連結会計年度は4億50百万円の減少〕

（財務活動によるキャッシュ・フロー）

主に不動産特定共同事業出資受入金の純減額が4億円となったこと、配当金の支払が2億36百万円あったことから、6億73百万円の資金の減少となりました。〔前連結会計年度は38億92百万円の増加〕

（参考）キャッシュ・フロー関連指標の推移

項目	平成27年3月期	平成28年3月期	平成29年3月期	平成30年3月期
自己資本比率(%)	19.2	19.0	20.2	22.4
時価ベースの自己資本比率(%)	24.9	14.4	12.8	21.8
キャッシュ・フロー対有利子負債比率(年)	—	—	50.7	—
インタレスト・カバレッジ・レシオ(倍)	—	—	2.7	—

※自己資本比率：自己資本÷総資産

※時価ベースの自己資本比率：普通株式時価総額÷総資産

※キャッシュ・フロー対有利子負債比率：有利子負債÷キャッシュ・フロー

※インタレスト・カバレッジ・レシオ：キャッシュ・フロー÷利払い

（注）1. いずれも連結ベースの財務数値により計算しております。

2. 普通株式時価総額は、期末株価終値及び自己株式を除く期末発行済株式数より計算しております。

3. 有利子負債は、連結貸借対照表に計上されている負債のうち、利子を支払っている全ての負債を対象としております。

4. キャッシュ・フローは、連結キャッシュ・フロー計算書の営業活動によるキャッシュ・フローを使用しております。

5. 利払いは、連結キャッシュ・フロー計算書の利息の支払額を使用しております。

※平成27年3月期、平成28年3月期及び平成30年3月期におけるキャッシュ・フロー対有利子負債比率及びインタレスト・カバレッジ・レシオにつきましては、営業活動によるキャッシュ・フローがマイナスのため記載しておりません。

③生産、受注及び販売の実績

生産、受注及び販売の実績については、「①財政状態及び経営成績の状況」における報告セグメントの業績に関連付けて記載しております。

（2）経営者の視点による経営成績等の状況に関する分析・検討内容

経営者の視点による当社グループの経営成績等の状況に関する認識及び分析・検討内容は次のとおりであります。

なお、文中の将来に関する事項は、当連結会計年度末において判断したものであります。

①重要な会計方針及び見積り

当社グループの連結財務諸表は、わが国において一般に公正妥当と認められる企業会計の基準に基づいて作成されています。この連結財務諸表の作成にあたっては、当連結会計年度における財務状態、経営成績及びキャッシュ・フローの状況に影響を与えるような見積り、予測を必要としております。当社グループは、過去の実績値や状況を踏まえ合理的と判断される前提に基づき、継続的に見積り、予測を行っております。そのため実際の結果は、見積り特有の不確実性があるため、これらの見積りと異なる場合があります。

②当連結会計年度の経営成績等の状況に関する認識及び分析・検討内容

当社グループの当連結会計年度の経営成績等は、以下のとおりであります。

a. 財政状態の分析

(資産)

当連結会計年度末の総資産は1,153億9百万円となり、前連結会計年度末比51億16百万円増加いたしました。主な増減及びその要因は以下のとおりであります。

当連結会計年度末の流動資産は958億43百万円となり、同34億19百万円増加いたしました。

これは、現金及び預金が同23億87百万円減少した一方で、受取手形及び売掛金が同15億54百万円増加したこと、投資用不動産の取得が進んだことにより販売用不動産が同47億56百万円増加したことによるものです。

また、当連結会計年度末の固定資産は194億66百万円となり、同16億96百万円増加いたしました。

これは、投資有価証券が同4億53百万円、投資その他の資産のその他（主に長期差入保証金）が同8億65百万円増加したことによるものです。

(負債)

当連結会計年度末の負債合計は894億84百万円となり、前連結会計年度末比15億35百万円増加いたしました。主な増減及びその要因は以下のとおりであります。

当連結会計年度末の流動負債は533億59百万円となり、同15億66百万円減少いたしました。

これは、流動負債のその他（主に前受金）が同6億37百万円増加した一方で、短期借入金が同15億76百万円、1年内返済予定の長期借入金が同5億78百万円減少したことによるものです。

また、当連結会計年度末の固定負債は361億25百万円となり、同31億2百万円増加いたしました。

これは、長期借入金が同24億8百万円増加したことによるものです。

(純資産)

当連結会計年度末の純資産は258億24百万円となり、前連結会計年度末比35億80百万円増加いたしました。

これは、前連結会計年度に係る株主配当金を支払った一方で、親会社株主に帰属する当期純利益36億95百万円を計上したことなどによるものです。

また、当連結会計年度末の自己資本比率は、22.40%となりました。

b. 経営成績の分析

(売上高)

当連結会計年度の売上高は、前連結会計年度比84億63百万円増収の1,008億29百万円となりました。

主な要因は、新築マンション及び中古マンションの引渡戸数が減少したこと等によりレジデンシャル事業において同107億55百万円の減収となった一方で、マンションのサブリースにおける空室率が前連結会計年度比0.4ポイント改善の2.5%となったことや、投資用不動産等の引渡棟数が増加したことにより、ソリューション事業において同191億68百万円の増収となったことによるものです。

また、オフィス改修工事の受注が減少したこと等により工事業業において同5億47百万円の減収となった一方で、オーストラリアにおけるホテル・リゾート運営事業の業績が概ね順調に推移したことにより海外事業において同2億95百万円の増収となりました。

(営業利益)

当連結会計年度の営業利益は、前連結会計年度比7億85百万円増益の48億69百万円となりました。

主な要因は、レジデンシャル事業における減収及び新築マンションの売上総利益率が同2.6ポイント低下したことにより同9億85百万円減益となったことや、工事業業において売上総利益率が低下したことにより同2億89百万円減益となった一方で、ソリューション事業における増収及び投資用不動産等の売上総利益率が同1.3ポイント上昇したことにより同20億62百万円増益となったことによるものです。

(経常利益)

当連結会計年度の経常利益は、前連結会計年度比8億85百万円増益の43億67百万円となりました。

主な要因は、営業利益が同7億85百万円増益となったことに加え、借入金金の低下により支払利息が同52百万円減少する等、営業外損益が同1億円改善したことによるものです。

(親会社株主に帰属する当期純利益)

当連結会計年度の親会社株主に帰属する当期純利益は、前連結会計年度比 6 億64百万円増益の36億95百万円となりました。

主な要因は、経常利益が同 8 億85百万円増益となった一方で、法人税、住民税及び事業税の負担が同 2 億29百万円増加したことによるものです。

c. キャッシュ・フローの分析

キャッシュ・フローの分析については、「(1) 経営成績等の状況の概要 ②キャッシュ・フローの状況」に記載しております。

当社グループの経営成績に重要な影響を与える要因としては、「第2 事業の状況 2. 事業等のリスク」に記載しております。なお、当社グループは、これらのリスクを十分認識した上で、発生の回避、または発生した場合には、その影響を最小限にとどめるように対応する方針であります。

当社グループの資本の財源及び資金の流動性については、不動産の取得及び建築費の支払い等の資金需要に対して、内部留保及び金融機関からの借入等により資金調達を行っております。運転資金につきましては、主に短期借入金、不動産開発に係る資金につきましては開発期間等を考慮し、主に長期借入金にて資金調達を行っております。

また、資金の流動性確保の観点から複数の金融機関との間で当座貸越契約を締結しており、グループ各社との間でキャッシュ・マネジメント・サービス(CMS)契約を締結し、グループ資金の効率化に努めております。

なお、当社の親会社であります大和ハウス工業株式会社により融資保証枠400億円が供与されております。

今後につきましても、企業の成長と更なる財務の健全性確保に努めてまいります。

経営方針・経営戦略、経営上の目標達成状況を判断するための客観的な指標等については、当連結会計年度の経営成績が、「中期経営計画2018」において目標とする売上高及び営業利益を上回り、4期連続増収増益となりました。

引き続き、「中期経営計画2018」の基本方針に則り、各事業への取り組みを推進し、同計画の最終年度であります平成31年3月期の業績につきましては、目標利益を上方修正し、売上高1,050億円、営業利益52億50百万円を見通しております。

「中期経営計画2018」において目標とする経営指標は以下のとおりであり、同計画を上回る見通しであります。

(単位：百万円)

	平成29年3月期		平成30年3月期		平成31年3月期		中期経営計画期間累計	
	中期経営計画	実績	中期経営計画	実績	中期経営計画	今回見通し	中期経営計画	今回見通し
売上高	90,000	92,366	98,000	100,829	105,000	105,000	293,000	298,195
営業利益	3,700	4,084	4,400	4,869	5,000	5,250	13,100	14,203

(注) 平成30年3月期の中期経営計画は、平成29年5月10日付公表の業績予想となります。

4 【経営上の重要な契約等】

該当事項はありません。

5 【研究開発活動】

該当事項はありません。

第3【設備の状況】

1【設備投資等の概要】

該当事項はありません。

2【主要な設備の状況】

当社グループにおける主要な設備は、以下のとおりであります。

(1) 提出会社

平成30年3月31日現在

事業所名 (所在地)	セグメントの名称	用途	帳簿価額(百万円)			従業員数 (人)
			建物及び 構築物	その他	合計	
本社 (東京都港区)	レジデンシャル事業 ソリューション事業 全社管理業務	自用	69	70	140	453 (26)
西日本支社 (大阪市北区)	レジデンシャル事業 ソリューション事業	自用	3	1	5	32 (4)

(注) 1. 投下資本の額は帳簿価額によっております。

2. 従業員数の()は、臨時従業員を外書きしております。

3. 前表のほか、当社の賃借している主要な転貸用マンションは次のとおりであります。

名称	所在地	建物延面積(m ²)
ピエス綱島	神奈川県横浜市港北区	11,884
パークビューステージ東陽町	東京都江東区	8,567

(2) 国内子会社

平成30年3月31日現在

会社名	事業所名 (所在地)	セグメントの名称	用途	帳簿価額(百万円)			従業員数 (人)
				建物及び 構築物	その他	合計	
株式会社コスモスモア	本社 (東京都港区)	工事事業	自用	12	47	59	151 (26)

(注) 1. 投下資本の額は帳簿価額によっております。

2. 従業員数の()は、臨時従業員を外書きしております。

(3) 在外子会社

平成30年3月31日現在

会社名	事業所名 (所在地)	セグメントの名称	用途	帳簿価額(百万円)			従業員数 (人)
				建物及び 構築物	その他	合計	
KBRV Resort Operations Pty Ltd	リゾート施設 (オーストラリア)	海外事業	自用	—	368	368	103 (214)

(注) 1. 投下資本の額は帳簿価額によっております。

2. 従業員数の()は、臨時従業員を外書きしております。

3【設備の新設、除却等の計画】

該当事項はありません。

第4【提出会社の状況】

1【株式等の状況】

(1)【株式の総数等】

①【株式の総数】

種類	発行可能株式総数(株)
普通株式	505,000,000
計	505,000,000

②【発行済株式】

種類	事業年度末現在 発行数(株) (平成30年3月31日)	提出日現在発行数(株) (平成30年6月22日)	上場金融商品取引所名 又は登録認可金融商品 取引業協会名	内容
普通株式	33,911,219	33,911,219	東京証券取引所 JASDAQ (スタンダード)	単元株式数 100株
計	33,911,219	33,911,219	—	—

(2)【新株予約権等の状況】

①【ストックオプション制度の内容】

該当事項はありません。

②【ライツプランの内容】

該当事項はありません。

③【その他の新株予約権等の状況】

該当事項はありません。

(3)【行使価額修正条項付新株予約権付社債券等の行使状況等】

該当事項はありません。

(4) 【発行済株式総数、資本金等の推移】

年月日	発行済株式総 数増減数(株)	発行済株式総 数残高(株)	資本金増減 額(百万円)	資本金残高 (百万円)	資本準備金増 減額(百万円)	資本準備金残 高(百万円)
平成25年6月21日(注)1	—	15,632,603	—	5,000	61	154
平成25年6月27日(注)2	19,387,800	35,020,403	4,750	9,750	4,750	4,904
平成25年6月27日(注)3	—	35,020,403	△4,750	5,000	△4,750	154
平成25年6月27日(注)4	2,040,816	37,061,219	—	5,000	—	154
平成25年6月27日(注)5	△3,150,000	33,911,219	—	5,000	—	154

(注) 1. 資本剰余金を原資とする配当に伴う資本準備金の積立であります。

2. 平成25年4月16日開催の取締役会及び平成25年6月21日開催の第44期定時株主総会の決議に基づく、第三者割当による新株式（普通株式）の発行。

発行新株式数 19,387,800株（普通株式）

発行価額 1株当たり 490円

資本組入額 1株当たり 245円

割当先及び割当株式数 大和ハウス工業株式会社 19,387,800株

3. 会社法第447条第1項及び第3項並びに会社法第448条第1項及び第3項の規定に基づき、資本金及び資本準備金を減少し、その他資本剰余金へ振替えております。

4. 平成25年6月21日開催の第44期定時株主総会の決議並びに普通株主による種類株主総会の決議及び第1種優先株主による種類株主総会の決議に基づく、取得請求権の行使に伴い、第1種優先株式を取得するのと引き換えに普通株式を交付したことによる増加であります。

5. 自己株式（第1種優先株式 3,150,000株）を消却しております。

(5) 【所有者別状況】

平成30年3月31日現在

区分	株式の状況（１単元の株式数100株）								単元未満 株式の状 況(株)
	政府及び 地方公共 団体	金融機関	金融商品 取引業者	その他 の法人	外国法人等		個人 その他	計	
					個人以外	個人			
株主数(人)	—	10	28	133	61	12	6, 536	6, 780	—
所有株式数(単元)	—	6, 620	8, 201	230, 438	20, 860	49	72, 664	338, 832	28, 019
所有株式数の割合(%)	—	1. 95	2. 42	68. 01	6. 16	0. 01	21. 45	100	—

(注) 1. 自己株式4,330株については、「個人その他」に43単元、「単元未満株式の状況」に30株含めて記載しております。

2. 上記「その他の法人」には、証券保管振替機構名義の株式が15単元含まれております。

(6) 【大株主の状況】

平成30年3月31日現在

氏名又は名称	住所	所有株式数 (千株)	発行済株式（自己株式を除く。）の総数に対する所有株式数の割合(%)
大和ハウス工業株式会社	大阪市北区梅田三丁目3番5号	21,428	63.19
GOLDMAN SACHS INTERNATIONAL (常任代理人 ゴールドマン・サックス証券株式会社)	133 FLEET STREET LONDON EC4A 2BB U.K. (東京都港区六本木六丁目10番1号)	389	1.14
UBS AG LONDON A/C IPB SEGREGATED CLIENT ACCOUNT (常任代理人 シティバンク、エヌ・エイ東京支店)	BAHNHOFSTRASSE 45,8001 ZURICH, SWITZERLAND (東京都新宿区新宿六丁目27番30号)	350	1.03
山路 孟	大阪府東大阪市	287	0.84
株式会社SBI証券	東京都港区六本木一丁目6番1号	235	0.69
株式会社長府製作所	山口県下関市長府扇町2番1号	185	0.54
株式会社三菱東京UFJ銀行	東京都千代田区丸の内二丁目7番1号	171	0.50
日本証券金融株式会社	東京都中央区日本橋茅場町一丁目2番10号	164	0.48
大和ライフネクスト株式会社	東京都港区赤坂五丁目1番33号	155	0.45
株式会社伸和エージェンシー	大阪市北区堂島浜二丁目1番29号	155	0.45
計	—	23,523	69.36

(注) 株式会社三菱東京UFJ銀行は、平成30年4月1日に株式会社三菱UFJ銀行に社名変更しております。

(7) 【議決権の状況】

① 【発行済株式】

平成30年3月31日現在

区分	株式数(株)	議決権の数(個)	内容
無議決権株式	—	—	—
議決権制限株式(自己株式等)	—	—	—
議決権制限株式(その他)	—	—	—
完全議決権株式(自己株式等)	(自己保有株式) 普通株式 4,300	—	—
完全議決権株式(その他)	普通株式 33,878,900	338,789	(注)
単元未満株式	普通株式 28,019	—	—
発行済株式総数	33,911,219	—	—
総株主の議決権	—	338,789	—

(注) 「完全議決権株式(その他)」欄の普通株式には、証券保管振替機構名義の株式が1500株（議決権15個）含まれております。

②【自己株式等】

平成30年3月31日現在

所有者の氏名又は名称	所有者の住所	自己名義所有 株式数(株)	他人名義所有 株式数(株)	所有株式数の 合計(株)	発行済株式総数に 対する所有株式数 の割合(%)
株式会社コスモスイニシア	東京都港区芝五丁目 34番6号	4,300	—	4,300	0.01
計	—	4,300	—	4,300	0.01

2【自己株式の取得等の状況】

【株式の種類等】

会社法第155条第7号に該当する普通株式の取得

(1)【株主総会決議による取得の状況】

該当事項はありません。

(2)【取締役会決議による取得の状況】

該当事項はありません。

(3)【株主総会決議又は取締役会決議に基づかないものの内容】

区分	株式数(株)	価額の総額(円)
当事業年度における取得自己株式	521	240,965
当期間における取得自己株式	49	42,638

(注)当期間における取得自己株式には、平成30年6月1日からこの有価証券報告書提出日までの単元未満株式の買取りにより取得した普通株式は含まれておりません。

(4)【取得自己株式の処理状況及び保有状況】

区分	当事業年度		当期間	
	株式数(株)	処分価額の総額 (円)	株式数(株)	処分価額の総額 (円)
引き受ける者の募集を行った取得自己株式	—	—	—	—
消却の処分を行った取得自己株式	—	—	—	—
合併、株式交換、会社分割に係る移転を行った取得自己株式	—	—	—	—
その他 (一)	—	—	—	—
保有自己株式数	4,330	—	4,379	—

(注)当期間における保有自己株式数には、平成30年6月1日からこの有価証券報告書提出日までの単元未満株式の買取り及び売渡による株式は含まれておりません。

3 【配当政策】

当社は、企業価値の向上と株主の皆さまに対する利益還元を経営上の最重要課題と認識しており、配当政策につきましては、株主各位に対する利益還元と継続的な成長に必要な内部留保の充実を考慮しつつ、安定した配当の実施に努めてまいります。

当社は、取締役会の決議により中間配当を行うことができる旨を定款に定めておりますが、毎事業年度における配当につきましては、期末配当金として年1回の剰余金の配当を行うことを基本方針としております。

これらの剰余金の配当の決定機関は、期末配当については株主総会、中間配当については取締役会であります。

当事業年度の配当につきましては、期初公表通り、期末配当金として1株当たり9円といたしました。

この結果、当事業年度の配当性向は8.49%となりました。

また、次年度（平成31年3月期）の配当につきましては、通期の業績見通しを考慮し、期末配当金として1株当たり2円増配の11円を予定しております。

なお、当事業年度に係る剰余金の配当は以下のとおりであります。

決議年月日	配当金の総額（百万円）	1株当たり配当額（円）
平成30年6月22日 定時株主総会決議	305	9

4 【株価の推移】

（1）【最近5年間の事業年度別最高・最低株価】

回次	第45期	第46期	第47期	第48期	第49期
決算年月	平成26年3月	平成27年3月	平成28年3月	平成29年3月	平成30年3月
最高(円)	1,551	689	678	477	1,025
最低(円)	403	396	327	335	365

（注）最高・最低株価は、平成25年7月16日より東京証券取引所JASDAQ（スタンダード）におけるものであり、それ以前は大阪証券取引所JASDAQ（スタンダード）におけるものであります。

（2）【最近6月間の月別最高・最低株価】

月別	平成29年10月	11月	12月	平成30年1月	2月	3月
最高(円)	488	504	620	1,025	966	870
最低(円)	425	452	477	609	703	690

（注）最高・最低株価は、東京証券取引所JASDAQ（スタンダード）におけるものであります。

5 【役員の状況】

男性 8 名 女性 2 名 (役員のうち女性の比率20.0%)

役名	職名	氏名	生年月日	略歴	任期	所有株式数 (株)
代表取締役社長	社長執行役員 R&D本部 本 部長 ソリューション 本部 本部長	高木 嘉幸	昭和35年6月21日生	昭和58年4月 株式会社日本リクルートセンター (現株式会社リクルートホールデ ィングス) 入社 昭和61年1月 当社入社 平成7年6月 KBRV Resort Operations Pty Ltd 取締役 平成8年5月 Kingfisher Bay Resort Village Pty Ltd (現North White Cliffs Pty Ltd) 取締役 (現任) 平成13年4月 Cosmos Australia Pty Ltd 取締役社長 (現任) CA Asset Management Pty Ltd 取締役社長 (現任) 平成17年6月 CA Finance Pty Ltd 取締役社長 (現任) 平成20年6月 当社取締役 平成21年9月 株式会社コスモスモア 取締役 平成21年10月 当社代表取締役社長 平成24年7月 株式会社コスモスモア 取締役 <統括部担当> 平成25年12月 株式会社コスモスモア 取締役 (現任) 平成28年12月 Cosmos Australia Holdings Pty Ltd 取締役社長 (現任) 平成29年6月 当社代表取締役社長 社長執行役員 R&D本部 本部長 ソリューション本部 本部長 (現任)	(注) 5	20,054
取締役	常務執行役員 経営管理本部 本部長	渡邊 典彦	昭和32年9月28日生	昭和56年4月 株式会社日本リクルートセンター (現株式会社リクルートホールデ ィングス) 入社 昭和61年7月 当社入社 平成20年1月 当社アセットマネジメント事業部 副事業部長 平成20年6月 株式会社コスモスモア 取締役 平成24年6月 当社常勤監査役 平成27年6月 当社取締役 (常勤監査等委員) 平成29年6月 当社取締役 常務執行役員 経営管理本部 本部長 (現任)	(注) 5	10,000
取締役	常務執行役員 レジデンシャル 本部 本部長 レジデンシャル 本部 分譲事業 部 事業部長	岡村 さゆり	昭和39年4月26日生	昭和62年4月 当社入社 平成26年4月 当社執行役員 内部統制室 室長 経営管理本部経営企画室 室長 平成27年4月 当社執行役員 経営管理本部 副本部長 平成29年4月 当社常務執行役員 レジデンシャル本部 本部長 レジデンシャル本部 分譲事業部 事業部長 (現任) 平成29年6月 当社取締役 (現任)	(注) 5	9,600

役名	職名	氏名	生年月日	略歴	任期	所有株式数 (株)
取締役	常務執行役員 企画開発本部 本部長 建築本部 本部長	柏木 恒二	昭和39年12月2日生	昭和63年4月 当社入社 平成24年10月 当社執行役員 住宅分譲本部マンション事業部 事業部長＜企画開発・シニア事業 担当＞ 住宅分譲本部マンション事業部 シニア事業推進室 室長 平成27年4月 当社執行役員 企画開発本部 副本部長 平成29年4月 当社常務執行役員 企画開発本部 本部長 平成29年6月 当社取締役（現任） 平成30年4月 当社常務執行役員 企画開発本部 本部長 建築本部 本部長（現任）	(注) 5	14,000
取締役	—	名島 弘尚	昭和36年3月15日生	昭和58年4月 大和ハウス工業株式会社入社 平成24年7月 大和ハウス・リート・マネジメン ト株式会社 出向 顧問 平成24年8月 同社代表取締役社長 平成25年3月 同社 転籍 平成28年9月 大和ハウス工業株式会社 転籍入 社 同社執行役員 同社経営管理本部連結経営管理部 長（現任） 大和ライフネクスト株式会社 監 査役（現任） 株式会社東富士 代表取締役社長 （現任） 平成29年6月 当社取締役（現任）	(注) 5	—
取締役	—	富樫 紀夫	昭和38年11月20日生	昭和58年9月 株式会社しんたくダイワハウス入 社 平成12年4月 大和ハウス工業株式会社入社 平成22年10月 同社東日本マンションブロック長 平成24年6月 大和ホームズオンライン株式会社 代表取締役社長（現任） 平成30年4月 大和ハウス工業株式会社執行役員 同社マンション事業推進部統括部 長＜マンション事業担当＞（現任） 平成30年6月 当社取締役（現任）	(注) 5	—
取締役	—	岡田 賢二	昭和26年3月23日生	昭和49年4月 伊藤忠商事株式会社入社 平成17年6月 同社執行役員 平成19年4月 同社金融・不動産・保険・物流カ ンパニーエグゼクティブバイスプ レジデント 建設・不動産部門長 平成20年4月 同社常務執行役員金融・不動産・ 保険・物流カンパニープレジデ ント 平成20年6月 同社代表取締役常務取締役 平成22年4月 同社代表取締役常務執行役員 平成24年6月 伊藤忠エネクス株式会社 代表取締役社長（現任） 平成26年6月 当社取締役（現任）	(注) 5	—

役名	職名	氏名	生年月日	略歴	任期	所有株式数 (株)
取締役 (常勤監査等委員)	—	桑原 伸一郎	昭和34年4月25日生	昭和59年4月 株式会社リクルート (現株式会社リクルートホールディングス) 入社 昭和61年1月 当社入社 平成20年6月 当社取締役 執行役員 事業本部関西支社 支社長 事業本部関西支社建築監理部 部長 平成21年10月 当社取締役 執行役員 ＜総務・人事・西日本支社担当＞ 西日本支社 支社長 西日本支社建築監理部 部長 平成21年11月 当社取締役 ＜総務・人事・西日本支社担当＞ 平成24年10月 当社取締役 常務執行役員 住宅分譲本部 副本部長 平成27年4月 当社取締役 常務執行役員 ソリューション本部 本部長 平成29年4月 当社取締役 平成29年6月 当社取締役 (常勤監査等委員) (現任)	(注) 6	34,431
取締役 (監査等委員)	—	坂東 規子	昭和24年3月31日生	昭和48年4月 長野法律事務所入所 平成7年4月 あたご法律事務所開設 (現任) 平成23年6月 当社監査役 平成27年6月 当社取締役 (監査等委員) (現任)	(注) 6	246
取締役 (監査等委員)	—	吉田 高志	昭和28年12月7日生	昭和54年11月 昭和監査法人 (現新日本有限責任監査法人) 入所 平成13年6月 監査法人太田昭和センチュリー (現新日本有限責任監査法人) 代表社員 平成20年8月 新日本有限責任監査法人 常務理事 平成25年7月 吉田公認会計士事務所開設 同事務所代表 (現任) 平成27年3月 日本精蠟株式会社 社外監査役 (現任) 平成27年6月 当社取締役 (監査等委員) (現任) 平成29年6月 三井住友トラスト・ホールディングス株式会社 取締役 (現任)	(注) 6	—
計						88,331

- (注) 1. 当社の監査等委員会は、桑原伸一郎、坂東規子、吉田高志の3名で構成されており、桑原伸一郎は常勤の監査等委員であります。
- なお、当社は、情報収集その他監査の実効性を高め、監査・監督機能を強化するために、常勤の監査等委員を置いております。
2. 取締役岡田賢二、同坂東規子、同吉田高志は、社外取締役であります。
3. 当社は、社外取締役岡田賢二、同坂東規子、同吉田高志を株式会社東京証券取引所の定めに基づく独立役員として指定し、同取引所に届け出ております。
4. 当社は、業務執行の迅速化、強化を図るとともに、全社・事業の視点における中長期戦略の立案・実行機能の強化を図ることを目的とし、執行役員制度を導入しております。※は取締役兼務者であります。

職名	氏名	担当
社長執行役員※	高木 嘉幸	R&D本部 本部長 ソリューション本部 本部長
常務執行役員※	渡邊 典彦	経営管理本部 本部長
常務執行役員※	岡村 さゆり	レジデンシャル本部 本部長 レジデンシャル本部 分譲事業部 事業部長
常務執行役員※	柏木 恒二	企画開発本部 本部長 建築本部 本部長
執行役員	走内 悦子	ソリューション本部 副本部長
執行役員	津田 英信	R&D本部 副本部長<シニア事業担当> 企画開発本部 副本部長<都市開発担当>
執行役員	高智 亮大朗	レジデンシャル本部 副本部長<流通事業・西日本支社担当>
執行役員	藤岡 英樹	R&D本部 副本部長<宿泊事業担当>
執行役員	森田 和彦	建築本部 副本部長

5. 平成30年6月22日開催の第49期定時株主総会の終結の時から1年間
6. 平成29年6月23日開催の第48期定時株主総会の終結の時から2年間

6 【コーポレート・ガバナンスの状況等】

(1) 【コーポレート・ガバナンスの状況】

コーポレート・ガバナンスに関する基本的な考え方

当社は、企業として社会的責任（CSR）を果たし、株主やお客さま、お取引先、従業員など様々なステークホルダーから信頼され、評価されることが、事業競争力並びに企業価値の向上に不可欠であると認識しております。

このような認識のもと、当社は経営上の重要な課題の一つであるコーポレート・ガバナンスの充実とともに経営の健全性・透明性の確保に努め、的確な経営の意思決定とそれに基づく迅速な業務執行、並びに適正な監督、監視、牽制機能を充実するための内部統制システムの整備・強化に努めております。

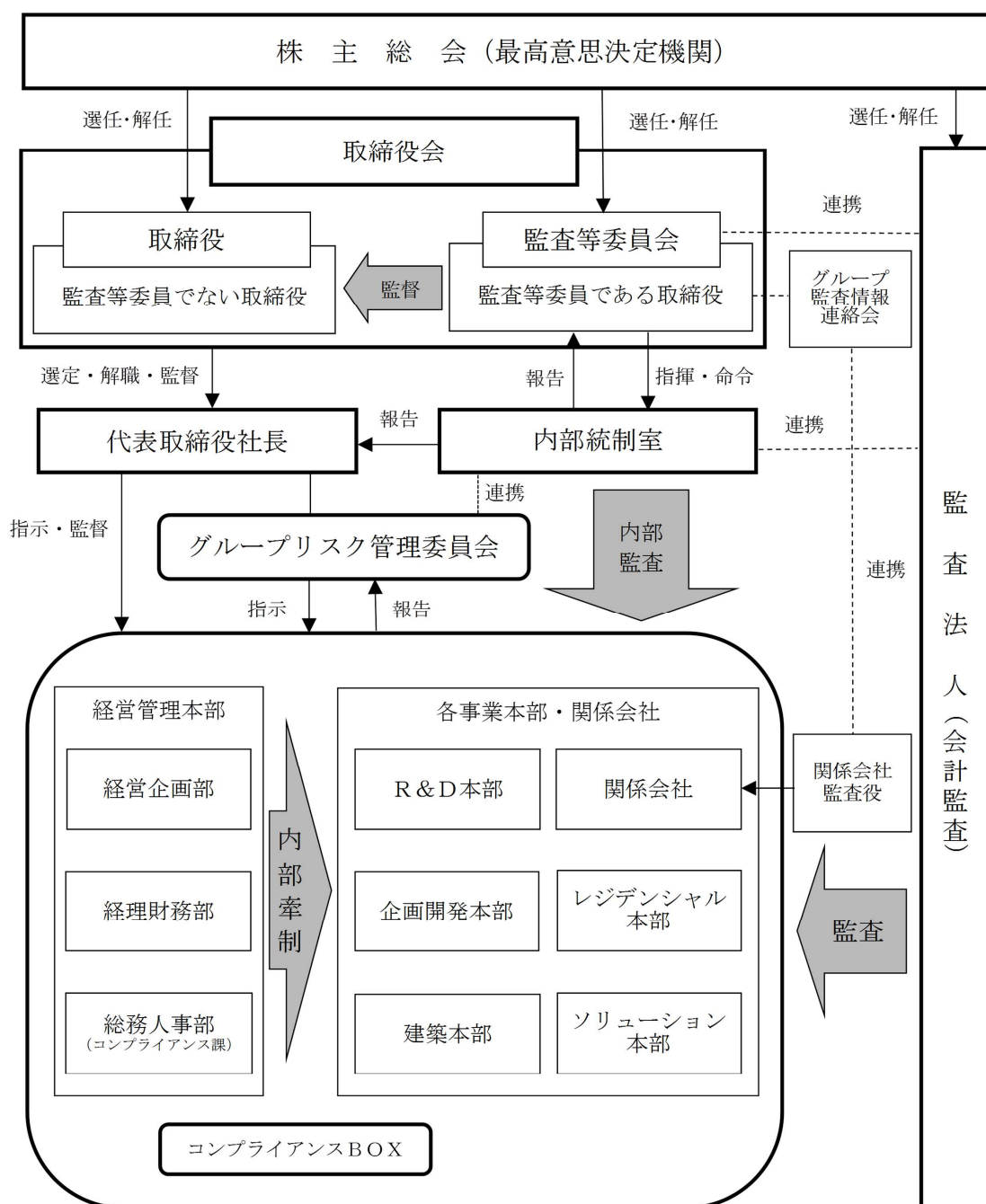
(1) 企業統治の体制

企業統治の体制の概要と採用する理由

当社は、監査等委員会設置会社であり、これは、議決権を有する監査等委員である取締役（複数の社外取締役含む）により、取締役会の監督機能をより一層強化することで、コーポレート・ガバナンス体制のさらなる拡充を図り、より透明性の高い経営の実現を目指すものであります。

会社の機関・内部統制の関係を図示すると、次のとおりであります。

（平成30年6月22日現在）



※ 取締役（監査等委員である取締役除く。）7名のうち社外取締役が1名、監査等委員3名のうち社外取締役が2名で構成されており、社外役員における、より専門的な知識・経験や情報による助言機能及び客観的な立場による監督機能が十分期待できる体制となっております。またグループ各社との間でグループ監査情報連絡会を設置しており、グループ経営の監視機能につきましても十分に機能する体制が整っていると考えております。

（２）会社の機関の内容及び内部統制システムの整備の状況

① 会社の機関の基本説明

〔取締役会〕

取締役会は、取締役（監査等委員である取締役除く。）7名（うち、社外取締役1名）と監査等委員3名（うち、社外取締役2名）で構成されており、経営の基本方針及び法令で定められた事項や経営に関する重要事項の決定、並びに取締役の職務の執行を監督する機関として、原則月1回開催しております。

〔常務会〕

常務会は、社長執行役員1名、常務執行役員3名で構成されており、経営及び事業における一定以上のリスクを伴う重要事項について協議・決定する機関として、原則週1回開催しております。

〔監査等委員会〕

監査等委員会は、常勤監査等委員である取締役1名と、非常勤の監査等委員である社外取締役2名で構成されており、社外取締役2名は、弁護士及び公認会計士を選任しております。監査等委員は、取締役会などの重要な会議に出席するほか、毎月の定例監査等委員会並びに必要に応じて臨時監査等委員会を開催し、監査等に関する重要事項につき協議を行い、職務執行の適法性、妥当性に関するチェックを行うとともに、会計監査人との連携を図り、適宜弁護士からアドバイスを受けております。

また、各関係会社の監査役との間で、グループ監査情報連絡会において、連携強化に努めております。

〔経営会議等〕

取締役会における経営に関する重要事項の決定等を受け、業務執行に係る重要事項につきましては、多面的な検討を行うとともに迅速かつ確かな経営判断を事業活動に反映するために、執行役員により構成される経営会議において検討・審議を行うこととしており、原則週1回開催しております。

また、常勤取締役、執行役員及び経営企画部等を構成員とする事業戦略会議において、事業環境の予測、マクロ市場動向の意見交換、エリア別の市場変化、各事業の戦略等を確認・共有するとともに、今後の事業計画、資金計画、人員計画の方針等について議論・検討しており、原則6ヶ月に1回開催しております。

さらに、当社の主力事業である不動産販売事業においては、担当役員等により構成される各本部会において、事業用地の仕入れ、建築プラン、及び販売戦略等に関する詳細な検討・審議をプロジェクト毎に行うこととしており、原則週1回開催しております。

② 内部統制システムの整備の状況

当社は、会社法及び会社法施行規則に基づき、業務の適正を確保するための体制整備の基本方針として、以下のとおり定めております。

1. 取締役及び使用人の職務の執行が法令及び定款に適合することを確保するための体制

- (1) 役職員の職務の執行が法令及び定款に適合することを確保し、かつ社会的責任を果たすため、グループ行動憲章を策定し、当社並びに当社グループにおける全役職員に周知徹底させる。
- (2) 管理部門にコンプライアンス担当部署を設置し、企業活動の健全性を確保する。
- (3) コンプライアンスBOX（コンプライアンス相談窓口）を設置し、当社グループにおける法令遵守上疑義のある行為等について、当社グループの職員が取締役会又は取締役会の指名する者へ直接情報提供を行う手段を設ける。
- (4) 内部監査部門は、監査計画を策定し内部監査を実施する。

2. 取締役の職務の執行に係る情報の保存及び管理に関する体制

重要な意思決定及び報告に関しては、文書の作成、保存、管理及び廃棄に関する文書管理規程を策定する。

3. 損失の危険の管理に関する規程その他の体制

- (1) 投資予算管理、投資ルール管理、不動産の事業化リスクの把握及びリスク解消の追跡等を行う部署を設置し、事業部門から独立してリスクの管理を行う。
- (2) 各部門は、それぞれの業務についてガイドラインやマニュアルの策定等を行い、担当業務に関するリスクの管理を行う。特に事業部門においては、統括する部署を設置し、事業活動に関するリスクの管理を行う。
- (3) 反社会的勢力には、企業として毅然とした態度で立ち向かう。

4. 取締役の職務の執行が効率的に行われることを確保するための体制
 - (1) 中期経営計画等の全社的な目標を定め、当社及び当社グループとして達成すべき目標を明確にする。
 - (2) 意思決定プロセスの簡素化等及び取締役の担当職域や職務権限の明確化等により意思決定の効率化を図る。
 - (3) 重要な事項については経営会議等を設置し、十分に協議を行った後に意思決定を行う。
5. 当社並びにその親会社及び子会社から成る企業集団における業務の適正を確保するための体制
 - (1) 子会社の取締役等及び使用人の職務の執行が法令及び定款に適合することを確保するための体制
 - ・グループ行動憲章を定め、グループ全体のコンプライアンス体制の構築に努める。
 - ・関係会社管理規程を定め、当社グループにおける業務の適正を確保する。
 - ・コンプライアンスBOX（コンプライアンス相談窓口）を設置し、当社グループの役職員が適切に情報提供を行う手段を設ける。
 - ・当社グループにおけるコンプライアンス体制について、内部監査を実施する。
 - (2) 子会社の損失の危険の管理に関する規程その他の体制
 - ・グループリスク管理委員会を設置し、当社グループ全体でリスクの把握、管理に努める。
 - (3) 子会社の取締役等の職務の執行が効率的に行われることを確保するための体制
 - ・中期経営計画等を定め、達成すべき目標を明確にする。
 - ・関係会社管理規程に基づき、子会社等の経営管理を行う。
 - (4) 子会社の取締役等の職務の執行に係る事項の当社への報告に関する体制
 - ・業務の執行状況及び重要な事項について報告を求めると共に、内部監査等によるモニタリングを行う。
 - (5) 財務報告の信頼性を確保するための体制
 - ・当社及び当社グループにおける財務報告の信頼性の確保に向け、「財務報告に係る基本方針」を定め、金融商品取引法が求める財務報告に係る内部統制報告制度に適切に対応する。
6. 当社の監査等委員会の職務を補助すべき取締役及び使用人に関する事項
 - ・内部監査部門に属する使用人を監査等委員会の職務を補助する使用人とする。
7. 前項の取締役及び使用人の当社の他の取締役（監査等委員である取締役を除く。）からの独立性に関する事項並びに当社の監査等委員会の当該取締役及び使用人に対する指示の実効性の確保に関する事項
 - ・内部監査部門を監査等委員会の直轄とし、監査等委員会の職務を補助する使用人（監査等委員会スタッフ）の人事異動、人事考課、懲戒に関しては、監査等委員会の事前の同意を得るものとする。
8. 当社の監査等委員会への報告に関する体制
 - (1) 当社の取締役（監査等委員である取締役を除く。）及び使用人が当社の監査等委員会に報告をするための体制
 - ・取締役及び使用人は、会社に重大な損失を与える事項が発生し又は発生するおそれがあるとき、役職員による違法又は不正な行為を発見したとき、その他監査等委員会が報告すべきものと定めた事項が生じたときは、監査等委員会に報告する。
 - ・法務担当部署は、係属中の訴訟等の一定の事項が記載された報告書を監査等委員会へ提出する。
 - (2) 子会社の取締役、監査役等及び使用人又はこれらの者から報告を受けた者が当社の監査等委員会に報告をするための体制
 - ・当社グループの内部監査を実施し、その結果を監査等委員会に報告する。
9. 監査等委員会へ報告した者が当該報告をしたことを理由として不利な取扱いを受けないことを確保するための体制
 - ・監査等委員会に報告した者は、その報告をしたことを理由として不利な取扱いを受けることがないものとする。
10. 監査等委員の職務の執行（監査等委員会の職務の執行に関するものに限る。）について生ずる費用の前払又は償還の手続その他の当該職務の執行について生ずる費用又は債務の処理に係る方針に関する事項
 - ・監査に必要な費用を予め予算として計上する。
 - ・社内規程において、監査費用の前払い又は償還の手続、その他の費用の処理に関する手続を定める。
11. その他当社の監査等委員会の監査が実効的に行われることを確保するための体制
 - ・内部監査部門を監査等委員会の直轄とし、その指揮命令のもと職務を行うものとする。

③ 内部統制システムの運用状況の概要

当事業年度における業務の適正を確保するための体制の運用状況の概要は以下のとおりであります。

1. コンプライアンスに関する取組

- ・法令・ルールを遵守することはもとより、公正・公平さや高い倫理観を持って行動をするため、コスモスイニシアグループ行動憲章を定め、全役職員に対する周知を継続しております。
- ・法令違反、不正行為の未然防止及び早期発見を目的として、コンプライアンス相談窓口（社内及び社外第三者）を設置し、運用すると共に、従業員に対する周知を継続しております。
- ・全従業員を対象とするコンプライアンス研修を実施し、法令遵守の徹底及びコンプライアンス意識の啓蒙を図っております。

2. リスク管理に対する取組

- ・リスク管理規程を定め、リスクに関する措置、事故発生時の対応、事件処理後の報告体制などについて、従業員へ周知しております。
- ・当社代表取締役を委員長とし、各事業部、子会社の責任者を委員として構成する「グループリスク管理委員会」を開催し、各事業部、子会社におけるリスクの抽出、評価、対応策の検討を実施しております。（当事業年度では12回開催）

3. 職務執行の適正及び効率性の確保に対する取組

- ・取締役会は、業務執行取締役5名、社外取締役1名、監査等委員である取締役3名（うち、社外取締役2名）を含む11名で構成されております。取締役会は当事業年度に12回（別途書面決議1回）開催し、各議案の審議、経営方針及び経営戦略にかかる重要事項の決定、並びに業務執行の状況を監督いたしました。
- ・中期経営計画を策定し、同計画に基づき各事業部門の方針及び業績目標を明確にし、社内でも共有すると共に、その進捗状況について定期的に取締役会に報告し、必要に応じて対策検討ができるようにしております。

4. 当社グループの業務の適正を確保することに対する取組

- ・当社グループの子会社の経営管理につきましては、主管部門にて子会社の経営管理体制を整備、統括すると共に、関係会社管理規程に従い子会社から当社の主管部門に事前に承認申請又は報告を行っております。
- ・内部監査部門は、子会社に対する監査を実施しており、グループ経営に対応したモニタリングを実施しております。

5. 監査等委員の職務の執行について

- ・監査等委員会は、常勤の監査等委員1名、社外取締役である監査等委員2名により構成されています。当事業年度では監査等委員会は14回開催し、監査に関する重要な事項に関して協議、決議を行っております。
- ・常勤の監査等委員は、常務会、経営会議、グループリスク管理委員会などの重要な会議に出席し、取締役及び執行役員等から業務執行の報告を受けると共に、その意思決定の過程や内容について監督を行っております。
- ・監査等委員会は、内部監査部門が行った監査に関する報告を受けるほか、内部監査部門と日常的に連携を取り、当社グループ全体で効果的な監査が実施可能な体制を構築しております。
- ・会計監査人からの四半期ごとの監査結果の報告を受けるとともに、適宜意見交換を行うことにより、適正な監査を実施しているか、検証しております。

④ 内部監査及び監査等委員会監査の状況

当社は、監査等委員会直轄の内部統制室を設置しており、内部監査計画を策定し、その計画に基づき、各部門並びに各関係会社における業務全般に関し、手続きの妥当性及法律・法令の遵守状況等について内部監査を実施し、業務改善に向けた具体的な助言・勧告等を行い、内部統制の有効性の向上に努めております。

また、監査等委員会は、会計監査人から定期的に監査に関する報告を受けるとともに情報交換を行うなど、相互の連携強化を図っております。

⑤ 社外取締役に関する事項

当社は、経営の監視及び監督機能を強化するため、社外取締役を選任しております。また、社外取締役を選任するための独立性については、専門的な知見に基づく客観的かつ適切な監督又は監査といった機能及び役割が期待され、一般株主と利益相反が生じるおそれがないことを基本方針としております。

社外取締役は、会社の最高権限者である代表取締役などと直接の利害関係のない有識者や経営者から選任し、当社の業務執行に携わらない客観的な立場からの経営判断を受けることで、取締役会の監督機能の強化を図っております。また、社外取締役である監査等委員は、監査体制の独立性を高め、客観的な立場から監査意見を表明することで、当社の企業統治の有効性に大きく寄与するものと考えております。

当社の社外取締役は3名（うち、監査等委員は2名）であります。

社外取締役（監査等委員）坂東規子氏は、当社の株式を所有しており、所有株式数については、「5. 役員の状況」に記載のとおりであります。また、当社又は連結子会社と関連当事者との取引については、関連当事者情報に記載のとおりであります。

社外取締役と当社の間には、その他の特別な利害関係はありません。

社外取締役岡田賢二氏は、伊藤忠商事株式会社において長年にわたって建設・不動産部門の責任者として事業を遂行され、豊富な経験と見識を有しておられること、また、伊藤忠エネクス株式会社の代表取締役を現任されており、当社の経営全般に対して有効かつ的確な助言をいただけると判断しております。

社外取締役（監査等委員）坂東規子氏は、弁護士として法的な専門知識と経験を有し、法律的地から重要事項についての有効かつ的確な助言をいただけると判断しております。

社外取締役（監査等委員）吉田高志氏は、公認会計士及び税理士として会計の専門的知識と経験を有し、客観的な立場から当社の経営についての助言をいただけると判断しております。なお、社外取締役の他の会社との兼任状況については下記のとおりであります。

〔社外役員の兼任状況〕

社外取締役岡田賢二氏は、伊藤忠エネクス株式会社の代表取締役であります。

社外取締役吉田高志氏は、日本精蠟株式会社の社外監査役及び三井住友トラスト・ホールディングス株式会社の社外取締役であります。

〔責任限定契約の内容〕

当社と各社外取締役および常勤監査等委員とは、会社法第427条第1項の規定に基づき、同法第423条第1項の損害賠償責任を限定する契約を締結しております。当該契約に基づく損害賠償責任の限度額は、法令が規定する最低責任限度額としております。

⑥ 会計監査の状況

当社は、会社法に基づく監査と金融商品取引法に基づく会計監査については、有限責任監査法人トーマツを選任し、監査及び四半期レビュー契約を締結しております。なお、同監査法人及び当社監査に従事する同監査法人の業務執行社員と当社の間には特別な利害関係はありません。

当事業年度における当社の監査業務を執行した公認会計士の氏名及び継続監査年数、監査業務に係る補助者の構成については下記のとおりであります。

〔業務を執行した公認会計士の氏名及び継続監査年数〕

公認会計士の氏名等		所属する監査法人名	継続監査年数
指定有限責任社員 業務執行社員	岡本 健一郎	有限責任監査法人トーマツ	—
	高見 勝文		—

（注）継続監査年数が7年以内の社員については、年数の記載を省略しております。

〔監査業務に係る補助者の構成〕

公認会計士4名・その他5名

(3) 役員報酬の内容

当事業年度における当社の取締役に対する報酬は下記のとおりであります。

役員区分	報酬等の総額 (百万円)	報酬等の種類別の総額 (百万円)		対象となる役員の 員数 (人)
		基本報酬	賞与	
取締役 (監査等委員を除く。) (社外取締役を除く。)	156	101	54	10
取締役 (監査等委員) (社外取締役を除く。)	17	13	4	2
社外役員	18	18	—	3

(注) 1. 平成27年6月23日開催の第46期定時株主総会において、取締役 (監査等委員である取締役除く。) の報酬限度額は年額5億円以内 (ただし、使用人兼務取締役の使用人分給与は含まない。)、また監査等委員である取締役の報酬限度額は年額60百万円以内と決議いただいております。

2. 取締役の報酬については、取締役の役位、当期の業績及び業績に対する各人の貢献度などを勘案して、株主総会にて決議された総額の範囲内にて決定いたしております。

(4) 取締役の定数

当社の取締役 (監査等委員であるものを除く。) は3名以上とし、監査等委員である取締役は3名以上とする旨定款に定めております。

(5) 取締役の選任の決議要件

当社は、取締役の選任決議について、議決権を行使することができる株主の議決権の3分の1以上を有する株主が出席し、その議決権の過半数をもって行い、その選任決議は累積投票によらないものとする旨定款に定めております。また、監査等委員とそれ以外の取締役とを区別して選任する旨定款に定めております。

(6) 自己株式の取得の決定機関

当社は、会社法第165条第2項の規定により、取締役会の決議によって市場取引等により自己株式を取得することができる旨定款に定めております。これは、自己株式の取得を取締役会の権限とすることにより、機動的な資本政策の実施を可能とすることを目的とするものであります。

(7) 取締役の責任免除の決定機関

当社は、会社法第427条第1項の規定により、取締役会の決議によって任務を怠ったことによる取締役 (業務執行取締役等であるものを除く。) の損害賠償責任を法令の限度において限定する契約を締結することができる旨定款に定めております。これは、業務執行を行わない取締役 (社外取締役含む。) が期待される役割を十分に発揮できるようにすることを目的とするものであります。

(8) 剰余金の配当等の決定機関

当社は、取締役会の決議によって毎年9月30日の最終の株主名簿に記載又は記録された株主又は登録株式質権者に対し、会社法第454条第5項に定める剰余金の配当をすることができる旨定款に定めております。これは、剰余金の配当等を取締役会の権限とすることにより、株主への機動的な利益還元を行うことを目的とするものであります。

(9) 株主総会の特別決議要件

当社は、会社法第309条第2項に定める決議は、議決権を行使することができる株主の議決権の3分の1以上を有する株主が出席し、その議決権の3分の2以上をもって行う旨定款に定めております。これは、株主総会における特別決議の定足数を緩和することにより、株主総会の円滑な運営を行うことを目的とするものであります。

(10) 株式の保有状況

イ. 投資株式のうち保有目的が純投資目的以外の目的であるものの銘柄数及び貸借対照表計上額の合計額
8 銘柄 857百万円

ロ. 保有目的が純投資目的以外の目的である投資株式の保有区分、銘柄、株式数、貸借対照表計上額及び保有目的
特定投資株式
該当事項はありません。

(2) 【監査報酬の内容等】

① 【監査公認会計士等に対する報酬の内容】

区分	前連結会計年度		当連結会計年度	
	監査証明業務に基づく報酬(百万円)	非監査業務に基づく報酬(百万円)	監査証明業務に基づく報酬(百万円)	非監査業務に基づく報酬(百万円)
提出会社	36	—	39	—
連結子会社	—	3	—	3
計	36	3	39	3

② 【その他重要な報酬の内容】

(前連結会計年度)

一部の連結子会社が、有限責任監査法人トーマツと同一のネットワークによって構成される会社に対して支払った監査証明業務に基づく報酬は9百万円であります。

(当連結会計年度)

当社及び一部の連結子会社が、有限責任監査法人トーマツと同一のネットワークによって構成される会社に対して支払った監査証明業務に基づく報酬は10百万円、非監査業務に基づく報酬は4百万円であります。

③ 【監査公認会計士等の提出会社に対する非監査業務の内容】

(前連結会計年度)

該当事項はありません。

(当連結会計年度)

該当事項はありません。

④ 【監査報酬の決定方針】

当社の監査公認会計士等に対する監査報酬は、監査日数等を勘案したうえで、常務会が監査等委員会の同意を得て決定する方針であります。

第5【経理の状況】

1. 連結財務諸表及び財務諸表の作成方法について

- (1) 当社の連結財務諸表は、「連結財務諸表の用語、様式及び作成方法に関する規則」（昭和51年大蔵省令第28号）に基づいて作成しております。
- (2) 当社の財務諸表は、「財務諸表等の用語、様式及び作成方法に関する規則」（昭和38年大蔵省令第59号。以下「財務諸表等規則」という。）に基づいて作成しております。
- また、当社は、特例財務諸表提出会社に該当し、財務諸表等規則第127条の規定により財務諸表を作成しております。

2. 監査証明について

当社は、金融商品取引法第193条の2第1項の規定に基づき、連結会計年度（平成29年4月1日から平成30年3月31日まで）の連結財務諸表及び事業年度（平成29年4月1日から平成30年3月31日まで）の財務諸表について、有限責任監査法人トーマツによる監査を受けております。

3. 連結財務諸表等の適正性を確保するための特段の取組みについて

当社は、連結財務諸表等の適正性を確保するための特段の取組みを行っております。具体的には、会計基準等の内容を適切に把握し、会計基準等の変更等についての的確に対応できる体制を整備するため、公益財団法人財務会計基準機構へ加入しております。

1 【連結財務諸表等】

(1) 【連結財務諸表】

① 【連結貸借対照表】

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (平成29年 3 月31日)	当連結会計年度 (平成30年 3 月31日)
資産の部		
流動資産		
現金及び預金	17,730	15,342
受取手形及び売掛金	2,539	4,094
販売用不動産	※ 1, ※ 3 33,851	※ 1, ※ 3 38,607
仕掛販売用不動産	※ 1 34,436	※ 1 33,676
その他のたな卸資産	146	173
繰延税金資産	1,402	1,570
その他	※ 1 2,321	※ 1 2,384
貸倒引当金	△5	△6
流動資産合計	92,423	95,843
固定資産		
有形固定資産		
建物及び構築物	464	489
減価償却累計額	△297	△330
建物及び構築物（純額）	167	158
その他	1,288	1,471
減価償却累計額	△649	△748
その他（純額）	※ 1 638	※ 1 722
有形固定資産合計	805	881
無形固定資産	205	219
投資その他の資産		
投資有価証券	※ 4 767	※ 4 1,221
長期貸付金	9,879	10,282
繰延税金資産	647	532
その他	※ 1 5,500	※ 1 6,366
貸倒引当金	△37	△37
投資その他の資産合計	16,757	18,365
固定資産合計	17,769	19,466
資産合計	110,193	115,309

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (平成29年 3 月31日)	当連結会計年度 (平成30年 3 月31日)
負債の部		
流動負債		
支払手形及び買掛金	6,391	6,497
短期借入金	26,034	※2 24,458
1年内返済予定の長期借入金	※2 7,801	※2 7,222
1年内返済予定の関係会社長期借入金	※2 1,940	※2 1,763
未払法人税等	476	678
賞与引当金	517	708
役員賞与引当金	29	59
不動産特定共同事業出資受入金	※3 4,740	※3 4,340
その他	6,994	7,631
流動負債合計	54,926	53,359
固定負債		
長期借入金	※2 22,196	※2 24,604
海外事業撤退損失引当金	7,154	7,477
その他	3,672	4,043
固定負債合計	33,022	36,125
負債合計	87,949	89,484
純資産の部		
株主資本		
資本金	5,000	5,000
資本剰余金	5,724	5,724
利益剰余金	13,055	16,513
自己株式	△1	△1
株主資本合計	23,778	27,236
その他の包括利益累計額		
為替換算調整勘定	△1,534	△1,411
その他の包括利益累計額合計	△1,534	△1,411
純資産合計	22,243	25,824
負債純資産合計	110,193	115,309

②【連結損益計算書及び連結包括利益計算書】

【連結損益計算書】

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日)	当連結会計年度 (自 平成29年4月1日 至 平成30年3月31日)
売上高	92,366	100,829
売上原価	※2 73,849	※2 81,341
売上総利益	18,516	19,487
販売費及び一般管理費	※1 14,432	※1 14,618
営業利益	4,084	4,869
営業外収益		
受取利息	2	3
設備賃貸料	45	42
その他	23	64
営業外収益合計	70	109
営業外費用		
支払利息	431	378
資金調達費用	154	181
持分法による投資損失	9	16
その他	77	34
営業外費用合計	672	611
経常利益	3,482	4,367
特別利益		
固定資産売却益	—	※3 1
特別利益合計	—	1
特別損失		
固定資産除却損	※4 35	※4 9
減損損失	—	16
その他	—	3
特別損失合計	35	29
税金等調整前当期純利益	3,446	4,340
法人税、住民税及び事業税	469	698
法人税等調整額	△53	△53
法人税等合計	415	645
当期純利益	3,030	3,695
親会社株主に帰属する当期純利益	3,030	3,695

【連結包括利益計算書】

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日)	当連結会計年度 (自 平成29年4月1日 至 平成30年3月31日)
当期純利益	3,030	3,695
その他の包括利益		
為替換算調整勘定	△19	122
その他の包括利益合計	※1 △19	※1 122
包括利益	3,011	3,818
(内訳)		
親会社株主に係る包括利益	3,011	3,818

③【連結株主資本等変動計算書】

前連結会計年度（自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日）

（単位：百万円）

	株主資本				
	資本金	資本剰余金	利益剰余金	自己株式	株主資本合計
当期首残高	5,000	5,724	10,262	△1	20,985
当期変動額					
剰余金の配当			△237		△237
親会社株主に帰属する当期純利益			3,030		3,030
自己株式の取得				△0	△0
株主資本以外の項目の当期変動額（純額）					－
当期変動額合計	－	－	2,793	△0	2,793
当期末残高	5,000	5,724	13,055	△1	23,778

	その他の包括利益累計額		純資産合計
	為替換算調整勘定	その他の包括利益累計額合計	
当期首残高	△1,515	△1,515	19,470
当期変動額			
剰余金の配当			△237
親会社株主に帰属する当期純利益			3,030
自己株式の取得			△0
株主資本以外の項目の当期変動額（純額）	△19	△19	△19
当期変動額合計	△19	△19	2,773
当期末残高	△1,534	△1,534	22,243

当連結会計年度（自 平成29年4月1日 至 平成30年3月31日）

（単位：百万円）

	株主資本				
	資本金	資本剰余金	利益剰余金	自己株式	株主資本合計
当期首残高	5,000	5,724	13,055	△1	23,778
当期変動額					
剰余金の配当			△237		△237
親会社株主に帰属する当期純利益			3,695		3,695
自己株式の取得				△0	△0
株主資本以外の項目の当期変動額（純額）					－
当期変動額合計	－	－	3,457	△0	3,457
当期末残高	5,000	5,724	16,513	△1	27,236

	その他の包括利益累計額		純資産合計
	為替換算調整勘定	その他の包括利益累計額合計	
当期首残高	△1,534	△1,534	22,243
当期変動額			
剰余金の配当			△237
親会社株主に帰属する当期純利益			3,695
自己株式の取得			△0
株主資本以外の項目の当期変動額（純額）	122	122	122
当期変動額合計	122	122	3,580
当期末残高	△1,411	△1,411	25,824

④【連結キャッシュ・フロー計算書】

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日)	当連結会計年度 (自 平成29年4月1日 至 平成30年3月31日)
営業活動によるキャッシュ・フロー		
税金等調整前当期純利益	3,446	4,340
減価償却費	204	256
減損損失	—	16
貸倒引当金の増減額 (△は減少)	△5	0
賞与引当金の増減額 (△は減少)	37	190
役員賞与引当金の増減額 (△は減少)	△0	29
受取利息及び受取配当金	△5	△5
支払利息	431	378
持分法による投資損益 (△は益)	9	16
売上債権の増減額 (△は増加)	△139	△1,543
たな卸資産の増減額 (△は増加)	△2,868	△4,018
仕入債務の増減額 (△は減少)	1,377	98
差入保証金の増減額 (△は増加)	△640	△406
預り金の増減額 (△は減少)	△562	△678
その他	882	1,200
小計	2,166	△124
利息及び配当金の受取額	1	10
利息の支払額	△427	△375
法人税等の支払額又は還付額 (△は支払)	△595	△509
営業活動によるキャッシュ・フロー	1,144	△999
投資活動によるキャッシュ・フロー		
有形固定資産の取得による支出	△469	△262
投資有価証券の取得による支出	—	△473
貸付金の回収による収入	116	47
その他	△96	△56
投資活動によるキャッシュ・フロー	△450	△744
財務活動によるキャッシュ・フロー		
短期借入金の純増減額 (△は減少)	1,703	△1,577
長期借入れによる収入	20,029	24,057
長期借入金の返済による支出	△15,833	△22,515
不動産特定共同事業出資受入れによる収入	4,740	5,440
不動産特定共同事業出資返還による支出	△6,500	△5,840
配当金の支払額	△236	△236
その他	△10	△0
財務活動によるキャッシュ・フロー	3,892	△673
現金及び現金同等物に係る換算差額	19	29
現金及び現金同等物の増減額 (△は減少)	4,605	△2,387
現金及び現金同等物の期首残高	13,124	17,730
現金及び現金同等物の期末残高	※1 17,730	※1 15,342

【注記事項】

(継続企業の前提に関する事項)

該当事項はありません。

(連結財務諸表作成のための基本となる重要な事項)

1. 連結の範囲に関する事項

連結子会社の数 11社

主要な連結子会社名は、「第1 企業の概況 4. 関係会社の状況」に記載しているため、省略しております。

このうち、株式会社コスモスホテルマネジメントについては、当連結会計年度において新たに設立したため、連結の範囲に含めております。

2. 持分法の適用に関する事項

(1) 持分法適用会社 1社

会社名 大和コスモスコンストラクション株式会社

(2) 持分法を適用していない関連会社(株式会社ラムザ都市開発)は、当期純利益(持分に見合う額)及び利益剰余金(持分に見合う額)等からみて、持分法の対象から除いても連結財務諸表に及ぼす影響が軽微であり、かつ、全体としても重要性がないため持分法の適用範囲から除外しております。

3. 連結子会社の事業年度等に関する事項

在外連結子会社の決算日は12月31日であり、連結財務諸表の作成にあたり、同日現在の財務諸表を使用しております。ただし連結決算日との間に生じた重要な取引については、連結上必要な調整を行うこととしております。以上を除いた連結子会社の決算日は、連結決算日と一致しております。

4. 会計方針に関する事項

(1) 重要な資産の評価基準及び評価方法

①有価証券

その他有価証券

時価のあるもの

決算期末日の市場価格等に基づく時価法

(評価差額は全部純資産直入法により処理し、売却原価は移動平均法により算定)

時価のないもの

移動平均法による原価法

②デリバティブ

時価法

③たな卸資産

主として個別法による原価法

(貸借対照表価額は収益性の低下に基づく簿価切下げの方法により算定)

(2) 重要な減価償却資産の減価償却の方法

①有形固定資産(リース資産を除く)

主として定率法

ただし、平成28年4月1日以降に取得した建物附属設備及び構築物については定額法

②自社利用のソフトウェア

主として社内における利用可能期間(5年)に基づく定額法

③上記以外の無形固定資産(リース資産を除く)

定額法

④リース資産

所有権移転外ファイナンス・リース

リース期間を耐用年数とし、残存価額を零とする定額法

①貸倒引当金

②賞与引当金

③役員賞与引当金

④海外事業撤退損失引当金

海外事業撤退に係る損失に備えるため、負担見込額を計上しております。

完成工事高及び完成工事原価の計上基準

- ・当連結会計年度末までの進捗部分について成果の確実性が認められる工事
工事進行基準
(工事の進捗率の見積りは原価比例法)
- ・その他の工事
工事完成基準

外貨建金銭債権債務は、連結決算日の直物為替相場により円貨に換算し、換算差額は損益として処理しております。なお、在外連結子会社の資産負債及び費用収益は、決算日の直物為替相場により円貨に換算し、換算差額は純資産の部における為替換算調整勘定に含めております。

①ヘッジ会計の方法

繰延ヘッジ処理

なお、金利スワップの特例処理の要件を満たすものについては、当該処理を採用しております。

②ヘッジ手段とヘッジ対象

ヘッジ手段	金利スワップ
ヘッジ対象	借入金

③ヘッジ方針

負債に係る金利変動リスクを回避するためにデリバティブ取引を利用しております。なお、投機目的によるデリバティブ取引は行わない方針であります。

④ヘッジ有効性評価の方法

ヘッジ開始時から有効性判定時点までの期間において、ヘッジ対象の相場変動またはキャッシュ・フロー変動とヘッジ手段の相場変動またはキャッシュ・フロー変動との累計を比較し、両者の変動額等を基礎にして判定しております。ただし特例処理の要件を満たしている金利スワップについては、その判定を持って有効性評価の判定に代えております。

(7) 連結キャッシュ・フロー計算書における資金の範囲

連結キャッシュ・フロー計算書における資金（現金及び現金同等物）は、手許現金、随時引き出し可能な預金及び容易に換金可能であり、かつ、価値の変動について僅少なりiskしか負わない取得日から3ヶ月以内に償還期限の到来する短期投資からなっております。

(8) その他連結財務諸表作成のための基本となる重要な事項

①消費税等の会計処理方法

税抜方式によっております。ただし、資産に係る控除対象外消費税等は、発生連結会計年度の期間費用として処理しております。

②連結納税制度の適用

連結納税制度を適用しております。

(未適用の会計基準等)

- ・「収益認識に関する会計基準」(企業会計基準第29号 平成30年3月30日 企業会計基準委員会)
- ・「収益認識に関する会計基準の適用指針」(企業会計基準適用指針第30号 平成30年3月30日 企業会計基準委員会)

(1) 概要

国際会計基準委員会 (IASB) 及び米国財務会計基準審議会 (FASB) は、共同して収益認識に関する包括的な会計基準の開発を行い、平成26年5月に「顧客との契約から生じる収益」(IASBにおいてはIFRS第15号、FASBにおいてはTopic606)を公表しており、IFRS第15号は平成30年1月1日以後開始する事業年度から、Topic606は平成29年12月15日より後に開始する事業年度から適用される状況を踏まえ、企業会計基準委員会において、収益認識に関する包括的な会計基準が開発され、適用指針と合わせて公表されたものです。

企業会計基準委員会の収益認識に関する会計基準の開発にあたっての基本的な方針として、IFRS第15号と整合性を図る便益の1つである財務諸表間の比較可能性の観点から、IFRS第15号の基本的な原則を取り入れることを出発点とし、会計基準を定めることとされ、また、これまで我が国で行われてきた実務等に配慮すべき項目がある場合には、比較可能性を損なわせない範囲で代替的な取扱いを追加することとされております。

(2) 適用予定日

平成34年3月期の期首から適用します。

(3) 当該会計基準等の適用による影響

「収益認識に関する会計基準」等の適用による連結財務諸表に与える影響額については、現時点で評価中でありま

す。

(表示方法の変更)

(連結貸借対照表)

前連結会計年度まで投資その他の資産の「その他」に含めて表示しておりました「投資有価証券」は、資産の総額の100分の1を超えたため、当連結会計年度より区分掲記しました。

なお、前連結会計年度の「投資有価証券」は767百万円であります。

(連結貸借対照表関係)

※1. 担保付資産及び担保付債務

担保に供している資産は、次のとおりであります。

	前連結会計年度 (平成29年3月31日)	当連結会計年度 (平成30年3月31日)
販売用不動産	12,873百万円	12,246百万円
仕掛販売用不動産	19,234	14,982
流動資産その他	27	37
有形固定資産その他	75	91
投資その他の資産その他	1,050	1,414
計	33,260	28,772

上記のほかに、CA Finance Pty Ltd による Daiwa House Australia Finance Pty Ltd からの借入に対して、Cosmos Australia Pty Ltd 及びその子会社4社の総財産(前連結会計年度5,584百万円、当連結会計年度5,975百万円)を担保に供しております。

※2. 上記※1に対する担保付債務は、次のとおりであります。

	前連結会計年度 (平成29年3月31日)	当連結会計年度 (平成30年3月31日)
短期借入金	一百万円	339百万円
1年内返済予定の長期借入金	5,500	1,790
1年内返済予定の関係会社長期借入金	1,940	1,763
長期借入金	18,017	19,202
計	25,458	23,095

※ 3. 不動産特定共同事業（匿名組合方式）の対象不動産等

不動産特定共同事業出資受入金は、不動産特定共同事業法第2条第3項第2号に定める契約（匿名組合契約）に基づく投資家からの出資受入金であります。当社は当該出資受入金により対象不動産等を取得し、運用後の収益を投資家に分配するものであり、その対象不動産等は次のとおりであります。

	前連結会計年度 (平成29年3月31日)	当連結会計年度 (平成30年3月31日)
販売用不動産	6,429百万円	7,229百万円

※ 4. 関連会社に対するものは、次のとおりであります。

	前連結会計年度 (平成29年3月31日)	当連結会計年度 (平成30年3月31日)
投資有価証券（株式）	193百万円	177百万円

5. 保証債務

次の顧客等について、金融機関からの借入等に対し保証を行っております。

	前連結会計年度 (平成29年3月31日)	当連結会計年度 (平成30年3月31日)
住宅ローン利用顧客	8,165百万円	5,382百万円

(連結損益計算書関係)

※ 1. 販売費及び一般管理費のうち主要な項目及び金額は、次のとおりであります。

	前連結会計年度 (自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日)	当連結会計年度 (自 平成29年4月1日 至 平成30年3月31日)
販売促進費	2,588百万円	2,332百万円
人件費	5,226	5,492
支払手数料	1,550	1,484
賞与引当金繰入額	434	569
役員賞与引当金繰入額	29	59
退職給付費用	66	69

※ 2. 売上原価に含まれるたな卸資産評価損は、次のとおりであります。

	前連結会計年度 (自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日)	当連結会計年度 (自 平成29年4月1日 至 平成30年3月31日)
	711百万円	318百万円

※ 3. 固定資産売却益の内容は、次のとおりであります。

	前連結会計年度 (自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日)	当連結会計年度 (自 平成29年4月1日 至 平成30年3月31日)
有形固定資産その他	一百万円	1百万円

※ 4. 固定資産除却損の内容は、次のとおりであります。

	前連結会計年度 (自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日)	当連結会計年度 (自 平成29年4月1日 至 平成30年3月31日)
建物及び構築物	12百万円	5百万円
有形固定資産その他	3	1
無形固定資産	18	2
計	35	9

(連結包括利益計算書関係)

※ 1. その他の包括利益に係る組替調整額及び税効果額

	前連結会計年度 (自 平成28年 4 月 1 日 至 平成29年 3 月31日)	当連結会計年度 (自 平成29年 4 月 1 日 至 平成30年 3 月31日)
為替換算調整勘定：		
当期発生額	△19百万円	122百万円
その他の包括利益合計	△19	122

(連結株主資本等変動計算書関係)

前連結会計年度 (自 平成28年 4 月 1 日 至 平成29年 3 月31日)

1. 発行済株式の種類及び総数並びに自己株式の種類及び株式数に関する事項

	当連結会計年度期首 株式数(株)	当連結会計年度増加 株式数(株)	当連結会計年度減少 株式数(株)	当連結会計年度末 株式数(株)
発行済株式				
普通株式	33,911,219	—	—	33,911,219
合計	33,911,219	—	—	33,911,219
自己株式				
普通株式 (注)	3,527	282	—	3,809
合計	3,527	282	—	3,809

(注) 自己株式の株式数の増加282株は、単元未満株式の買取による増加282株であります。

2. 新株予約権及び自己新株予約権に関する事項

該当事項はありません。

3. 配当に関する事項

(1) 配当金支払額

(決議)	株式の種類	配当金の 総額 (百万円)	1株当たり 配当額 (円)	基準日	効力発生日
平成28年 6 月23日 定時株主総会	普通株式	237	7	平成28年 3 月31日	平成28年 6 月24日

(2) 基準日が当連結会計年度に属する配当のうち、配当の効力発生日が翌連結会計年度となるもの

(決議)	株式の種類	配当金の 総額 (百万円)	配当の原資	1株当たり 配当額 (円)	基準日	効力発生日
平成29年 6 月23日 定時株主総会	普通株式	237	利益剰余金	7	平成29年 3 月31日	平成29年 6 月26日

当連結会計年度 (自 平成29年 4 月 1 日 至 平成30年 3 月31日)

1. 発行済株式の種類及び総数並びに自己株式の種類及び株式数に関する事項

	当連結会計年度期首 株式数(株)	当連結会計年度増加 株式数(株)	当連結会計年度減少 株式数(株)	当連結会計年度末 株式数(株)
発行済株式				
普通株式	33,911,219	—	—	33,911,219
合計	33,911,219	—	—	33,911,219
自己株式				
普通株式 (注)	3,809	521	—	4,330
合計	3,809	521	—	4,330

(注) 自己株式の株式数の増加521株は、単元未満株式の買取による増加521株であります。

2. 新株予約権及び自己新株予約権に関する事項

該当事項はありません。

3. 配当に関する事項

(1) 配当金支払額

(決議)	株式の種類	配当金の 総額 (百万円)	1株当たり 配当額 (円)	基準日	効力発生日
平成29年6月23日 定時株主総会	普通株式	237	7	平成29年3月31日	平成29年6月26日

(2) 基準日が当連結会計年度に属する配当のうち、配当の効力発生日が翌連結会計年度となるもの

(決議)	株式の種類	配当金の 総額 (百万円)	配当の原資	1株当たり 配当額 (円)	基準日	効力発生日
平成30年6月22日 定時株主総会	普通株式	305	利益剰余金	9	平成30年3月31日	平成30年6月25日

(連結キャッシュ・フロー計算書関係)

※1. 現金及び現金同等物の期末残高と連結貸借対照表に掲記されている科目の金額との関係

	前連結会計年度 (自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日)	当連結会計年度 (自 平成29年4月1日 至 平成30年3月31日)
現金及び預金勘定	17,730百万円	15,342百万円
現金及び現金同等物計	17,730	15,342

(リース取引関係)

(借主側)

1. ファイナンス・リース取引

所有権移転外ファイナンス・リース取引

①リース資産の内容

有形固定資産

主として、当社にて利用する事務機器(工具、器具及び備品)であります。

②リース資産の減価償却の方法

連結財務諸表作成のための基本となる重要な事項「4. 会計方針に関する事項(2) 重要な減価償却資産の減価償却の方法」に記載のとおりであります。

2. オペレーティング・リース取引

オペレーティング・リース取引のうち解約不能のものに係る未経過リース料

(単位: 百万円)

	前連結会計年度 (平成29年3月31日)	当連結会計年度 (平成30年3月31日)
1年内	1,215	1,174
1年超	11,281	11,997
合計	12,497	13,172

(金融商品関係)

1. 金融商品の状況に関する事項

(1) 金融商品に対する取組方針

当社グループは、資金運用については、流動性を重視し、短期的な預金等に限定しており、資金調達については主に銀行借入による方針であります。また、デリバティブ取引は、事業に係る資産及び負債に関する金利及び為替の変動等のリスクヘッジを目的とし、投機的な取引は行わない方針であります。

(2) 金融商品の内容及びそのリスク

営業債権である受取手形及び売掛金は、顧客の信用リスクにさらされております。

投資有価証券は、主に業務上の関係を有する企業の株式であり、市場価格の変動リスクにさらされております。

貸付金は、取引先企業等の信用リスクにさらされております。また、海外事業に関する長期貸付金については、為替の変動リスクにさらされております。

営業債務である支払手形及び買掛金は、その殆どが1年以内の支払期日であります。

借入金は、主に事業用地の取得資金及び建築費の支払いに係る資金調達であります。

営業債務及び借入金は、資金調達に係る流動性リスク（支払期日に支払いを実現できなくなるリスク）にさらされております。また変動金利の借入金は金利の変動リスクに、外貨建て預金は為替の変動リスクにさらされております。

デリバティブ取引は、借入金に係る支払金利の変動リスクに対するヘッジ取引を目的とした金利スワップ取引であります。なお、ヘッジ会計に関するヘッジ手段とヘッジ方針、ヘッジ有効性の評価方法等については、「（連結財務諸表作成のための基本となる重要な事項）4. 会計方針に関する事項（6）重要なヘッジ会計の方法」に記載のとおりであります。

(3) 金融商品に係るリスク管理体制

①信用リスク（取引先の契約不履行等に係るリスク）の管理

当社グループは、営業債権、貸付金について、取引先ごとに期日及び残高を管理するとともに、主要な取引先の状況を定期的にモニタリングし、財務状況等の悪化等による回収懸念の早期把握や軽減を図っております。

②市場リスク（為替や金利等の変動リスク）の管理

当社グループは、投資有価証券については、定期的に時価や発行体（取引先企業）の財務状況等を把握し、また、取引先企業との関係を勘案して保有状況を継続的に見直しております。

デリバティブ取引については、デリバティブ取引管理規程に基づき、半期毎に取引の計画・方針・概要を取締役会で承認し、これに従い財務部門が取引を行っており、経理部門が取引条件、時価等の取引状況について、毎月取締役会に報告しております。

③資金調達に係る流動性リスク（支払期日に支払いを実行できなくなるリスク）の管理

当社グループは、各部署からの報告に基づき経理財務部が適時に資金繰計画を作成・更新するとともに、手許流動性の維持等により流動性リスクを管理しております。

(4) 金融商品の時価等に関する事項についての補足説明

金融商品の時価には、市場価格に基づく価額のほか、市場価格がない場合には合理的に算定された価額が含まれております。当該価額の算定においては変動要因を織り込んでいるため、異なる前提条件等を採用することにより、当該価額が変動することがあります。

2. 金融商品の時価等に関する事項

連結貸借対照表計上額、時価及びこれらの差額については、次のとおりであります。なお、時価を把握することが極めて困難と認められるものは含まれておりません。

前連結会計年度（平成29年3月31日）

	連結貸借対照表 計上額(百万円)	時価 (百万円)	差額 (百万円)
(1) 現金及び預金	17,730	17,730	—
(2) 受取手形及び売掛金	2,539	2,539	—
(3) 長期貸付金	9,879		
海外事業撤退損失引当金※	△7,154		
	2,724	2,880	155
資産計	22,995	23,151	155
(1) 支払手形及び買掛金	6,391	6,391	—
(2) 短期借入金	26,034	26,034	—
(3) 1年内返済予定の長期借入金	7,801	7,801	—
(4) 1年内返済予定の関係会社長期借入金	1,940	1,940	—
(5) 長期借入金	22,196	22,090	△106
負債計	64,364	64,258	△106
デリバティブ取引	—	—	—
デリバティブ取引計	—	—	—

※海外事業に関する長期貸付金については、当社グループは海外事業から撤退する方針であることから、海外事業撤退に係る損失に備えるための海外事業撤退損失引当金を計上しているため、これを控除しております。

当連結会計年度（平成30年3月31日）

	連結貸借対照表 計上額(百万円)	時価 (百万円)	差額 (百万円)
(1) 現金及び預金	15,342	15,342	—
(2) 受取手形及び売掛金	4,094	4,094	—
(3) 長期貸付金	10,282		
海外事業撤退損失引当金※	△7,477		
	2,804	2,958	153
資産計	22,241	22,395	153
(1) 支払手形及び買掛金	6,497	6,497	—
(2) 短期借入金	24,458	24,458	—
(3) 1年内返済予定の長期借入金	7,222	7,222	—
(4) 1年内返済予定の関係会社長期借入金	1,763	1,763	—
(5) 長期借入金	24,604	24,551	△53
負債計	64,546	64,493	△53

※海外事業に関する長期貸付金については、当社グループは海外事業から撤退する方針であることから、海外事業撤退に係る損失に備えるための海外事業撤退損失引当金を計上しているため、これを控除しております。

(注) 1. 金融商品の時価の算定方法、有価証券及びデリバティブ取引に関する事項

(資産)

(1) 現金及び預金、(2) 受取手形及び売掛金

これらは短期間で決済されるため、時価は帳簿価額にほぼ等しいことから、当該帳簿価額によっております。

(3) 長期貸付金

長期貸付金の時価については、元利金の合計額を同様の新規貸付を行った場合に想定される利率で割り引いて算定する方法によっております。

(負債)

(1) 支払手形及び買掛金、(2) 短期借入金、(3) 1年内返済予定の長期借入金、

(4) 1年内返済予定の関係会社長期借入金

これらは短期間で決済されるため、時価は帳簿価額にほぼ等しいことから、当該帳簿価額によっております。

(5) 長期借入金

これらの時価については、元利金の合計額を同様の新規借入を行った場合に想定される利率で割り引いて算定する方法によっております。なお、一部の長期借入金の時価については、金利スワップと一体として処理された元利金の合計額を借入期間に応じた利率で割り引いた現在価値により算出しております。

(デリバティブ取引)

注記事項「デリバティブ取引関係」をご参照下さい。

2. 時価を把握することが極めて困難と認められる金融商品

(単位：百万円)

区分	前連結会計年度	当連結会計年度
非上場株式等	767	1,221

非上場株式等については、市場価格がなく、時価を把握することが極めて困難と認められることから時価開示の対象とはしておりません。

3. 金銭債権の連結決算日後の償還予定額

前連結会計年度（平成29年3月31日）

種類	1年以内 (百万円)	1年超 2年以内 (百万円)	2年超 3年以内 (百万円)	3年超 4年以内 (百万円)	4年超 5年以内 (百万円)	5年超 (百万円)
現金及び預金	17,730	—	—	—	—	—
受取手形及び売掛金	2,539	—	—	—	—	—
長期貸付金	—	9,879	—	—	—	—
合計	20,270	9,879	—	—	—	—

当連結会計年度（平成30年3月31日）

種類	1年以内 (百万円)	1年超 2年以内 (百万円)	2年超 3年以内 (百万円)	3年超 4年以内 (百万円)	4年超 5年以内 (百万円)	5年超 (百万円)
現金及び預金	15,342	—	—	—	—	—
受取手形及び売掛金	4,094	—	—	—	—	—
長期貸付金	—	10,282	—	—	—	—
合計	19,436	10,282	—	—	—	—

4. 長期借入金及びその他の有利子負債の連結決算日後の返済予定額

前連結会計年度（平成29年3月31日）

種類	1年以内 (百万円)	1年超 2年以内 (百万円)	2年超 3年以内 (百万円)	3年超 4年以内 (百万円)	4年超 5年以内 (百万円)	5年超 (百万円)
短期借入金	26,034	—	—	—	—	—
長期借入金	7,801	13,509	7,317	164	58	1,146
関係会社長期借入金	1,940	—	—	—	—	—
合計	35,775	13,509	7,317	164	58	1,146

当連結会計年度（平成30年3月31日）

種類	1年以内 (百万円)	1年超 2年以内 (百万円)	2年超 3年以内 (百万円)	3年超 4年以内 (百万円)	4年超 5年以内 (百万円)	5年超 (百万円)
短期借入金	24,458	—	—	—	—	—
長期借入金	7,222	17,112	7,476	9	6	—
関係会社長期借入金	1,763	—	—	—	—	—
合計	33,444	17,112	7,476	9	6	—

(有価証券関係)

1. その他有価証券

前連結会計年度（平成29年3月31日）

非上場株式（連結貸借対照表計上額767百万円）については、市場価格がなく、時価を把握することが極めて困難と認められることから、記載しておりません。

当連結会計年度（平成30年3月31日）

非上場株式（連結貸借対照表計上額1,221百万円）については、市場価格がなく、時価を把握することが極めて困難と認められることから、記載しておりません。

2. 売却したその他有価証券

前連結会計年度（自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日）

該当事項はありません。

当連結会計年度（自 平成29年4月1日 至 平成30年3月31日）

種類	売却額(百万円)	売却益の合計額 (百万円)	売却損の合計額 (百万円)
株式	3	0	—

(デリバティブ取引関係)

ヘッジ会計が適用されているデリバティブ取引

前連結会計年度（平成29年3月31日）

ヘッジ会計の 方法	取引の種類	主なヘッジ対象	契約額等 (百万円)	契約額等のうち 1年超 (百万円)	時価 (百万円)
金利スワップの 特例処理	金利スワップ取引 変動受取・固定支払	長期借入金	1,000	—	(注)

(注) 金利スワップの特例処理によるものは、ヘッジ対象とされている長期借入金と一体として処理されているため、その時価は、当該長期借入金の時価に含めて記載しております。

当連結会計年度（平成30年3月31日）

該当事項はありません。

(退職給付関係)

1. 採用している退職給付制度の概要

当社及び一部の連結子会社は、確定拠出年金制度を採用しております。

2. 確定拠出制度

当社及び一部の連結子会社の確定拠出制度への要拠出額は、前連結会計年度（自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日）83百万円、当連結会計年度（自 平成29年4月1日 至 平成30年3月31日）90百万円であります。

(税効果会計関係)

1. 繰延税金資産及び繰延税金負債の発生の主な原因別の内訳

	前連結会計年度 (平成29年3月31日)	当連結会計年度 (平成30年3月31日)
繰延税金資産	(百万円)	(百万円)
税務上の繰越欠損金	22,702	12,723
貸倒引当金損金算入限度超過額	13	11
賞与引当金	163	218
販売用不動産評価損	1,279	1,327
減損損失	—	5
その他	2,598	2,584
繰延税金資産小計	26,756	16,872
評価性引当額	△24,705	△14,763
繰延税金資産合計	2,050	2,109
繰延税金負債		
未収還付事業税	—	△5
繰延税金負債合計	—	△5
繰延税金資産の純額	2,050	2,103

なお、繰延税金資産の純額は、連結貸借対照表の以下の項目に含まれております。

	(百万円)	(百万円)
流動資産－繰延税金資産	1,402	1,570
固定資産－繰延税金資産	647	532

2. 法定実効税率と税効果会計適用後の法人税等の負担率との間に重要な差異があるときの、当該差異の原因となった主要な項目別の内訳

	前連結会計年度 (平成29年3月31日)	当連結会計年度 (平成30年3月31日)
	(%)	(%)
法定実効税率	30.9	30.9
(調整)		
交際費等永久に損金に算入されない項目	1.2	1.0
受取配当金等永久に益金算入されない項目	△0.9	△0.7
評価性引当額の増減額	△18.5	△16.1
住民税均等割	0.3	0.2
法人税額の特別控除	△1.0	△1.1
その他	0.1	0.7
税効果会計適用後の法人税等の負担率	12.1	14.9

(資産除去債務関係)

前連結会計年度（平成29年3月31日）

当社及び連結子会社1社は、本社オフィス等の不動産賃貸借契約に基づき、退去時における原状回復に係る債務を資産除去債務として認識しております。

当該資産除去債務に関しては、資産除去債務の負債計上に代えて、不動産賃貸借契約に関する敷金の回収が最終的に見込めないと認められる金額を合理的に見積り、そのうち当連結会計年度の負担に属する金額を費用に計上する方法によっております。

当連結会計年度末における金額は、期首時点において敷金の回収が最終的に見込めないと算定した金額51百万円に、増床等に伴う増加額14百万円、当連結会計年度の負担に属する金額7百万円を調整した58百万円であります。

当連結会計年度（平成30年3月31日）

当社及び連結子会社1社は、本社オフィス等の不動産賃貸借契約に基づき、退去時における原状回復に係る債務を資産除去債務として認識しております。

当該資産除去債務に関しては、資産除去債務の負債計上に代えて、不動産賃貸借契約に関する敷金の回収が最終的に見込めないと認められる金額を合理的に見積り、そのうち当連結会計年度の負担に属する金額を費用に計上する方法によっております。

当連結会計年度末における金額は、期首時点において敷金の回収が最終的に見込めないと算定した金額58百万円に、増床等に伴う増加額20百万円、賃貸借契約の条件見直しに伴う減少額1百万円及び当連結会計年度の負担に属する金額7百万円を調整した69百万円であります。

(賃貸等不動産関係)

賃貸等不動産の総額については、重要性が乏しいため、注記を省略しております。

(セグメント情報等)

【セグメント情報】

1. 報告セグメントの概要

当社の報告セグメントは、当社の構成単位のうち分離された財務情報が入手可能であり、経営者が、経営資源の配分の決定及び業績を評価するために、定期的に検討を行う対象となっているものであります。

当社グループは、当社をはじめとする事業会社によって構成されており、各事業会社は、取り扱う商品・サービスについて包括的な戦略を立案し、事業展開を行っております。

したがって、当社グループは、各事業会社を基礎とした製品・サービス別のセグメントから構成されており、「その他」の事業領域を除いた「レジデンシャル事業」「ソリューション事業」「工事業」「海外事業」の4つを報告セグメントとしております。

「レジデンシャル事業」は、新築マンション、新築一戸建、タウンハウス及びリノベーションマンション販売並びにリテール仲介等を行っております。「ソリューション事業」は、マンション及びオフィスビル等の転貸（サブリース）及び投資用不動産等の販売・仲介並びに不動産に関するコンサルティング、ホテルの運営等を行っております。

「工事業」は、マンションギャラリー設営工事、インテリア販売、オフィス移転改修工事、賃貸住宅の建築工事等を行っております。「海外事業」は、オーストラリアにおいてホテル・リゾート運営事業等を行っております。

2. 報告セグメントごとの売上高、利益又は損失、資産、負債その他の項目の金額の算定方法

報告されている事業セグメントの会計処理の方法は、「連結財務諸表作成のための基本となる重要な事項」における記載と概ね同一であります。

報告セグメントの利益は、営業利益ベースの数値であります。

セグメント間の内部売上高及び振替高は、市場実勢価格に基づいております。

3. 報告セグメントごとの売上高、利益又は損失、資産、負債その他の項目の金額に関する情報
前連結会計年度（自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日）

（単位：百万円）

	報告セグメント				
	レジデンス シャル事業	ソリューション事業	工事業	海外事業	計
売上高					
外部顧客への売上高	49,853	28,446	9,937	4,023	92,260
セグメント間の内部売上高又は振替高	31	55	1,016	9	1,113
計	49,884	28,502	10,953	4,032	93,373
セグメント利益	2,128	2,799	360	305	5,594
セグメント資産	43,151	32,428	4,077	12,476	92,133
その他の項目					
減価償却費	17	34	56	75	184
有形固定資産及び無形固定資産の増加額	106	22	195	225	549

	その他 (注) 1	合計	調整額 (注) 2	連結財務諸表 計上額 (注) 3
売上高				
外部顧客への売上高	105	92,366	—	92,366
セグメント間の内部売上高又は振替高	8	1,121	△1,121	—
計	113	93,487	△1,121	92,366
セグメント利益	△23	5,570	△1,486	4,084
セグメント資産	153	92,287	17,905	110,193
その他の項目				
減価償却費	9	193	10	204
有形固定資産及び無形固定資産の増加額	0	549	41	590

（注） 1. その他には、不動産管理事業等が含まれております。

2. 調整額は以下のとおりであります。

- （1）セグメント利益の調整額△14億86百万円には、セグメント間取引消去2百万円、各セグメントに配賦していない全社費用△14億89百万円が含まれております。全社費用は、主に報告セグメントに帰属しない連結財務諸表提出会社での一般管理費であります。
- （2）セグメント資産の調整額179億5百万円には、セグメント間取引消去△9億58百万円、全社資産188億64百万円が含まれております。全社資産は、主に報告セグメントに帰属しない連結財務諸表提出会社での余資運用資金（現金及び預金）、長期投資資金（投資有価証券）及び管理部門に係る資産等であります。
- （3）減価償却費の調整額10百万円には、セグメント間取引消去△2百万円、全社資産に係る償却額12百万円が含まれております。
- （4）有形固定資産及び無形固定資産の増加額の調整額41百万円には、セグメント間取引消去△29百万円、報告セグメントに帰属しない連結財務諸表提出会社での本社等に係る設備投資額71百万円が含まれております。

3. セグメント利益は、連結財務諸表の営業利益と調整を行っております。

当連結会計年度（自 平成29年4月1日 至 平成30年3月31日）

（単位：百万円）

	報告セグメント				
	レジデンシャル事業	ソリューション事業	工事業	海外事業	計
売上高					
外部顧客への売上高	39,129	47,647	9,593	4,319	100,690
セグメント間の内部売上高又は振替高	—	23	812	8	844
計	39,129	47,671	10,406	4,328	101,535
セグメント利益	1,142	4,862	71	367	6,443
セグメント資産	39,692	40,578	4,056	13,322	97,649
その他の項目					
減価償却費	24	17	100	92	233
有形固定資産及び無形固定資産の増加額	34	69	103	87	294

	その他 (注) 1	合計	調整額 (注) 2	連結財務諸表 計上額 (注) 3
売上高				
外部顧客への売上高	139	100,829	—	100,829
セグメント間の内部売上高又は振替高	0	845	△845	—
計	139	101,675	△845	100,829
セグメント利益	△8	6,434	△1,564	4,869
セグメント資産	133	97,783	17,525	115,309
その他の項目				
減価償却費	7	241	15	256
有形固定資産及び無形固定資産の増加額	1	296	59	355

（注） 1．その他には、不動産管理事業等が含まれております。

2．調整額は以下のとおりであります。

- （1）セグメント利益の調整額△15億64百万円には、セグメント間取引消去4百万円、各セグメントに配賦していない全社費用△15億69百万円が含まれております。全社費用は、主に報告セグメントに帰属しない連結財務諸表提出会社での一般管理費であります。
- （2）セグメント資産の調整額175億25百万円には、セグメント間取引消去△8億62百万円、全社資産183億88百万円が含まれております。全社資産は、主に報告セグメントに帰属しない連結財務諸表提出会社での余資運用資金（現金及び預金）、長期投資資金（投資有価証券）及び管理部門に係る資産等であります。
- （3）減価償却費の調整額15百万円には、セグメント間取引消去△3百万円、全社資産に係る償却額18百万円が含まれております。
- （4）有形固定資産及び無形固定資産の増加額の調整額59百万円には、セグメント間取引消去△8百万円、報告セグメントに帰属しない連結財務諸表提出会社での本社等に係る設備投資額68百万円が含まれております。

3．セグメント利益は、連結財務諸表の営業利益と調整を行っております。

【関連情報】

前連結会計年度（自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日）

1. 製品及びサービスごとの情報

「セグメント情報 3. 報告セグメントごとの売上高、利益又は損失、資産、負債その他の項目の金額に関する情報」に同様の情報を記載しているため、製品及びサービスごとの情報の記載を省略しております。

2. 地域ごとの情報

(1) 売上高

本邦の外部顧客への売上高の金額は、連結損益計算書の売上高の90%超であるため、記載を省略しております。

(2) 有形固定資産

(単位：百万円)

日本	オーストラリア	合計
426	379	805

3. 主要な顧客ごとの情報

外部顧客への売上高のうち、特定顧客への売上高が連結損益計算書の売上高の10%に満たないため、主要な顧客ごとの情報の記載を省略しております。

当連結会計年度（自 平成29年4月1日 至 平成30年3月31日）

1. 製品及びサービスごとの情報

「セグメント情報 3. 報告セグメントごとの売上高、利益又は損失、資産、負債その他の項目の金額に関する情報」に同様の情報を記載しているため、製品及びサービスごとの情報の記載を省略しております。

2. 地域ごとの情報

(1) 売上高

本邦の外部顧客への売上高の金額は、連結損益計算書の売上高の90%超であるため、記載を省略しております。

(2) 有形固定資産

(単位：百万円)

日本	オーストラリア	合計
490	390	881

3. 主要な顧客ごとの情報

外部顧客への売上高のうち、特定顧客への売上高が連結損益計算書の売上高の10%に満たないため、主要な顧客ごとの情報の記載を省略しております。

【報告セグメントごとの固定資産の減損損失に関する情報】

前連結会計年度（自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日）

該当事項はありません。

当連結会計年度（自 平成29年4月1日 至 平成30年3月31日）

重要性が乏しいため、記載を省略しております。

【報告セグメントごとののれんの償却額及び未償却残高に関する情報】

前連結会計年度（自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日）及び当連結会計年度（自 平成29年4月1日 至 平成30年3月31日）

該当事項はありません。

【報告セグメントごとの負ののれん発生益に関する情報】

前連結会計年度（自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日）及び当連結会計年度（自 平成29年4月1日 至 平成30年3月31日）

該当事項はありません。

【関連当事者情報】

前連結会計年度（自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日）

1. 関連当事者との取引

（1）連結財務諸表提出会社と関連当事者との取引

連結財務諸表提出会社の親会社及び主要株主（会社等の場合に限る。）等

種類	会社等の名称 又は氏名	所在地	資本金 又は 出資金 (百万円)	事業の内容又 は職業	議決権等の 所有 (被所有) 割合 (%)	関連当事者 との関係	取引内容	取引金額 (百万円)	科目	期末残高 (百万円)
親会社	大和ハウス 工業株式会社	大阪市 北区	161,699	戸建住宅 賃貸住宅 マンション 住宅ストック 商業施設 事業施設 その他	(被所有) 直接 63.2 間接 0.9	当社への 役員派遣 2人	債務の 被保証	29,588	—	—
							保証料の 支払	63	流動負債その他	35

（注）取引条件及び取引条件の決定方針

市場価格・市場金利を勘案して、一般的な取引条件と同様に決定しております。

（2）連結財務諸表提出会社の連結子会社と関連当事者との取引

連結財務諸表提出会社と同一の親会社をもつ会社等及び連結財務諸表提出会社のその他の関係会社の子会社等

種類	会社等の名称 又は氏名	所在地	資本金 又は 出資金	事業の内容 又は職業	議決権等の 所有 (被所有) 割合	関連当事者 との関係	取引内容	取引金額 (百万円)	科目	期末残高 (百万円)
同一の 親会社 を持つ 会社	Daiwa House Australia Finance Pty Ltd	オース トラリ ア連邦 ニュー サウス ウェー ルズ州	24,000千 豪ドル	金融業	—	金銭の貸借	金銭の借入	—	1年内返済予定 の関係会社長期 借入金	1,940
							利息の支払	73	—	—

（注）取引条件及び取引条件の決定方針

市場金利を勘案して、一般的な取引条件と同様に決定しております。

2. 親会社又は重要な関連会社に関する注記

（1）親会社情報

大和ハウス工業株式会社（東京証券取引所市場第一部に上場）

（2）重要な関連会社の要約財務情報

該当事項はありません。

当連結会計年度（自 平成29年4月1日 至 平成30年3月31日）

1. 関連当事者との取引

（1）連結財務諸表提出会社と関連当事者との取引

連結財務諸表提出会社の親会社及び主要株主（会社等の場合に限る。）等

種類	会社等の名称 又は氏名	所在地	資本金 又は 出資金 (百万円)	事業の内容又 は職業	議決権等の 所有 (被所有) 割合 (%)	関連当事者 との関係	取引内容	取引金額 (百万円)	科目	期末残高 (百万円)
親会社	大和ハウス 工業株式会社	大阪市 北区	161,699	戸建住宅 賃貸住宅 マンション 住宅ストック 商業施設 事業施設 その他	(被所有) 直接 63.2 間接 0.9	当社への 役員派遣 2人	債務の 被保証	30,930	—	—
							保証料の 支払	66	流動負債その他	35
							共同事業に おける売買 代金	—	受取手形及び売 掛金	1,243

（注）取引条件及び取引条件の決定方針

市場価格・市場金利を勘案して、一般的な取引条件と同様に決定しております。

（2）連結財務諸表提出会社の連結子会社と関連当事者との取引

連結財務諸表提出会社と同一の親会社をもつ会社等及び連結財務諸表提出会社のその他の関係会社の子会社等

種類	会社等の名称 又は氏名	所在地	資本金 又は 出資金	事業の内容又 は職業	議決権等の 所有 (被所有) 割合	関連当事者 との関係	取引内容	取引金額 (百万円)	科目	期末残高 (百万円)
同一の 親会社 を持つ 会社	Daiwa House Australia Finance Pty Ltd	オース トラリ ア連邦 ニュー サウス ウェー ルズ州	24,000千 豪ドル	金融業	—	金銭の貸借	金銭の返済	264	1年内返済予定 の関係会社長期 借入金	1,763
							利息の支払	67	—	—

（注）取引条件及び取引条件の決定方針

市場金利を勘案して、一般的な取引条件と同様に決定しております。

2. 親会社又は重要な関連会社に関する注記

（1）親会社情報

大和ハウス工業株式会社（東京証券取引所市場第一部に上場）

（2）重要な関連会社の要約財務情報

該当事項はありません。

(1株当たり情報)

	前連結会計年度 (自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日)	当連結会計年度 (自 平成29年4月1日 至 平成30年3月31日)
1株当たり純資産額(円)	656.02	761.63
1株当たり当期純利益(円)	89.38	108.98

(注) 1. 潜在株式調整後1株当たり当期純利益については、潜在株式が存在しないため記載しておりません。

2. 1株当たり当期純利益の算定上の基礎は、以下のとおりであります。

	前連結会計年度 (自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日)	当連結会計年度 (自 平成29年4月1日 至 平成30年3月31日)
親会社株主に帰属する当期純利益(百万円)	3,030	3,695
普通株主に帰属しない金額(百万円)	—	—
普通株式に係る親会社株主に帰属する当期純利益 (百万円)	3,030	3,695
普通株式に係る期中平均株式数(株)	33,907,542	33,907,099

(重要な後発事象)

海外事業におけるホテル・リゾート運営事業からの撤退

当社の在外連結子会社であるCosmos Australia Pty Ltd(以下、「CA」という。)が所有するKBRV Resort Operations Pty Ltd(以下、「KBRV R0」という。)の全株式について、平成30年2月21日付でSeaLink Travel Group Limited(オーストラリア証券市場に上場)の子会社であるSeaLink Fraser Island Pty Ltd(以下、「SeaLink」という。)との間で株式譲渡契約を締結し、平成30年3月26日に株式を譲渡しました。これにより、海外事業におけるホテル・リゾート運営事業からの撤退が完了いたしました。なお、CAの決算日が12月31日であるため、当該事項を重要な後発事象として記載しております。

1. 海外事業におけるホテル・リゾート運営事業からの撤退の理由

KBRV R0は、オーストラリア・クイーンズランド州フレーザー島(世界遺産に登録されている世界最大の砂の島)において、現地の事業パートナー会社(ホテル・リゾート資産保有会社)と連携してホテル・リゾート運営事業を行ってまいりました。

当社は、今後の経営基盤の強化と成長戦略のさらなる実践を主要テーマに掲げた「中期経営計画2018」において、海外事業につきましては、ホテル・リゾート運営事業から撤退し、大和ハウスグループと連携したオーストラリアでの住宅開発の継続・強化を図ることを基本方針としております。

このような状況におきまして、当社は、当該ホテル・リゾート運営事業につきましては、その事業性を高く評価いただいたSeaLinkへ譲渡することを現地パートナー会社とも合意し、本株式譲渡を行うことが、当社並びにKBRV R0の今後の発展と企業価値の向上に資するものと考え、本株式譲渡の判断に至りました。

2. 株式譲渡先の名称

SeaLink Fraser Island Pty Ltd

3. 株式譲渡日

平成30年3月26日

4. 譲渡する孫会社の概要

(1) 名称: KBRV Resort Operations Pty Ltd

(2) 事業内容: ホテル・リゾート運営事業

(3) 当社との取引内容: 当社の連結子会社であるCAが同社株式の100%を保有しており、当社の代表取締役1名が同社の取締役を兼務してまいりました。

5. 譲渡する株式の数、譲渡価額、譲渡損益及び譲渡後の持分比率

(1) 譲渡する株式の数: 13,271,529株

(2) 譲渡価額: 616百万円(※)

(3) 譲渡損益: 本株式譲渡に伴う海外事業におけるホテル・リゾート運営事業撤退による損益影響は、現在精査中ではありますが、過年度において撤退に伴う負担見込額に対し海外事業撤退損失引当金を計上しているため、重要な損益は発生しないと判断しております。

(4) 譲渡後の持分比率: ー%

※円貨額については平成30年3月末日レート(1豪ドル=81.66円)にて換算しております。

⑤【連結附属明細表】

【社債明細表】

該当事項はありません。

【借入金等明細表】

区分	当期首残高 (百万円)	当期末残高 (百万円)	平均利率 (%)	返済期限
短期借入金	26,034	24,458	0.40	—
1年以内に返済予定の長期借入金	7,801	7,222	0.65	—
1年以内に返済予定の関係会社長期借入金	1,940	1,763	3.35	—
1年以内に返済予定のリース債務	11	10	—	—
長期借入金（1年以内に返済予定のものを除く。）	22,196	24,604	0.62	平成31年～平成35年
リース債務（1年以内に返済予定のものを除く。）	11	13	—	平成31年～平成34年
合計	57,995	58,072	—	—

(注) 1. 平均利率は期末の利率に基づいて算定しております。

2. リース債務の平均利率については、リース料総額に含まれる利息相当額を控除する前の金額でリース債務を連結貸借対照表に計上しているため、記載しておりません。

3. 長期借入金及びリース債務（1年以内に返済予定のものを除く。）の連結決算日後5年以内における返済予定額は以下のとおりであります。

	1年超2年以内	2年超3年以内	3年超4年以内	4年超5年以内
長期借入金（百万円）	17,112	7,476	9	6
リース債務（百万円）	5	3	3	—

【資産除去債務明細表】

該当事項はありません。

(2)【その他】

当連結会計年度における四半期情報等

(累計期間)	第1四半期	第2四半期	第3四半期	当連結会計年度
売上高（百万円）	14,275	35,281	58,511	100,829
税金等調整前四半期（当期）純利益又は税金等調整前四半期純損失（△）（百万円）	△19	248	1,613	4,340
親会社株主に帰属する四半期（当期）純利益又は親会社株主に帰属する四半期純損失（△）（百万円）	△28	163	1,347	3,695
1株当たり四半期（当期）純利益又は1株当たり四半期純損失（△）（円）	△0.83	4.81	39.74	108.98

(会計期間)	第1四半期	第2四半期	第3四半期	第4四半期
1株当たり四半期純利益又は1株当たり四半期純損失（△）（円）	△0.83	5.64	34.93	69.24

2 【財務諸表等】

(1) 【財務諸表】

① 【貸借対照表】

(単位：百万円)

	前事業年度 (平成29年 3 月31 日)	当事業年度 (平成30年 3 月31 日)
資産の部		
流動資産		
現金及び預金	15,051	13,584
売掛金	※ 3 674	※ 3 1,468
販売用不動産	※ 1, ※ 2 33,871	※ 1, ※ 2 38,640
仕掛販売用不動産	※ 1 34,493	※ 1 33,709
その他のたな卸資産	24	39
前渡金	※ 1 1,048	※ 1 1,040
前払費用	176	222
繰延税金資産	1,330	1,530
その他	※ 3 1,751	※ 3 1,617
貸倒引当金	△0	△1
流動資産合計	88,421	91,851
固定資産		
有形固定資産		
建物	104	111
工具、器具及び備品	82	174
土地	8	8
リース資産	3	2
有形固定資産合計	199	297
無形固定資産		
商標権	7	10
ソフトウェア	54	54
その他	40	40
無形固定資産合計	102	104
投資その他の資産		
投資有価証券	573	857
関係会社株式	2,689	2,787
長期前払費用	28	161
繰延税金資産	630	509
差入保証金	4,244	4,567
その他	※ 3 86	76
貸倒引当金	△37	△37
投資その他の資産合計	8,215	8,923
固定資産合計	8,517	9,324
資産合計	96,939	101,176

(単位：百万円)

	前事業年度 (平成29年3月31日)	当事業年度 (平成30年3月31日)
負債の部		
流動負債		
支払手形	4,990	4,868
短期借入金	26,009	24,119
1年内返済予定の長期借入金	※1 7,463	※1 6,898
リース債務	1	0
未払金	※3 2,774	※3 2,207
未払費用	※3 184	※3 200
未払法人税等	436	585
前受金	1,948	3,858
預り金	※3 1,223	※3 545
賞与引当金	421	656
役員賞与引当金	24	56
不動産特定共同事業出資受入金	※2 4,740	※2 4,340
その他	※3 276	※3 237
流動負債合計	50,493	48,574
固定負債		
長期借入金	※1 22,013	※1 24,447
リース債務	2	1
その他	※3 3,605	※3 3,972
固定負債合計	25,621	28,421
負債合計	76,114	76,996
純資産の部		
株主資本		
資本金	5,000	5,000
資本剰余金		
資本準備金	154	154
その他資本剰余金	5,507	5,507
資本剰余金合計	5,662	5,662
利益剰余金		
利益準備金	85	108
その他利益剰余金		
繰越利益剰余金	10,078	13,410
利益剰余金合計	10,163	13,519
自己株式	△1	△1
株主資本合計	20,824	24,180
純資産合計	20,824	24,180
負債純資産合計	96,939	101,176

②【損益計算書】

(単位：百万円)

	前事業年度 (自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日)	当事業年度 (自 平成29年4月1日 至 平成30年3月31日)
売上高	※1 78,387	※1 86,779
売上原価	※1 64,974	※1 72,331
売上総利益	13,412	14,448
販売費及び一般管理費	※1, ※2 9,973	※1, ※2 9,942
営業利益	3,438	4,505
営業外収益		
受取利息	※1 8	※1 14
受取配当金	※1 102	※1 103
設備賃貸料	45	42
その他	※1 16	※1 5
営業外収益合計	172	166
営業外費用		
支払利息	※1 354	※1 307
資金調達費用	※1 154	※1 181
その他	10	31
営業外費用合計	519	520
経常利益	3,091	4,150
特別損失		
固定資産除却損	※3 38	※3 10
特別損失合計	38	10
税引前当期純利益	3,053	4,140
法人税、住民税及び事業税	344	626
法人税等調整額	△56	△78
法人税等合計	288	547
当期純利益	2,764	3,593

【売上原価明細書】

a. 不動産売上原価明細書

	前事業年度 (自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日)		当事業年度 (自 平成29年4月1日 至 平成30年3月31日)	
区分	金額 (百万円)	構成比 (%)	金額 (百万円)	構成比 (%)
土地代	19,148	36.8	24,945	42.6
工事代	23,046	44.4	25,522	43.6
労務費	640	1.2	761	1.3
経費	259	0.5	299	0.5
リニューアル販売用不動産	8,914	17.1	7,050	12.0
計	52,008	100.0	58,580	100.0

(注) 原価計算の方法は個別原価計算によっております。

b. 不動産賃貸費用明細書

	前事業年度 (自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日)		当事業年度 (自 平成29年4月1日 至 平成30年3月31日)	
区分	金額 (百万円)	構成比 (%)	金額 (百万円)	構成比 (%)
賃借料	10,699	87.5	11,279	85.7
保守修繕費	1,261	10.3	1,436	10.9
水道光熱費	177	1.4	193	1.5
減価償却費	0	0.0	0	0.0
その他	94	0.8	249	1.9
計	12,233	100.0	13,159	100.0

c. その他の原価明細書

	前事業年度 (自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日)		当事業年度 (自 平成29年4月1日 至 平成30年3月31日)	
区分	金額 (百万円)	構成比 (%)	金額 (百万円)	構成比 (%)
経費	731	100.0	590	100.0
計	731	100.0	590	100.0

③【株主資本等変動計算書】

前事業年度（自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日）

（単位：百万円）

	株主資本								純資産合計	
	資本金	資本剰余金			利益剰余金			自己株式		株主資本合計
		資本準備金	その他資本剰余金	資本剰余金合計	利益準備金	その他利益剰余金	利益剰余金合計			
						繰越利益剰余金				
当期首残高	5,000	154	5,507	5,662	61	7,574	7,636	△1	18,297	18,297
当期変動額										
剰余金の配当						△237	△237		△237	△237
利益準備金の積立					23	△23	—		—	—
当期純利益						2,764	2,764		2,764	2,764
自己株式の取得								△0	△0	△0
当期変動額合計	—	—	—	—	23	2,503	2,527	△0	2,527	2,527
当期末残高	5,000	154	5,507	5,662	85	10,078	10,163	△1	20,824	20,824

当事業年度（自 平成29年4月1日 至 平成30年3月31日）

（単位：百万円）

	株主資本									純資産合計
	資本金	資本剰余金			利益剰余金			自己株式	株主資本合計	
		資本準備金	その他資本剰余金	資本剰余金合計	利益準備金	その他利益剰余金 繰越利益剰余金	利益剰余金合計			
当期首残高	5,000	154	5,507	5,662	85	10,078	10,163	△1	20,824	20,824
当期変動額										
剰余金の配当						△237	△237		△237	△237
利益準備金の積立					23	△23	—		—	—
当期純利益						3,593	3,593		3,593	3,593
自己株式の取得								△0	△0	△0
当期変動額合計	—	—	—	—	23	3,332	3,355	△0	3,355	3,355
当期末残高	5,000	154	5,507	5,662	108	13,410	13,519	△1	24,180	24,180

【注記事項】

(重要な会計方針)

1. 資産の評価基準及び評価方法

(1) 有価証券

①子会社株式及び関連会社株式

移動平均法による原価法

②その他有価証券

時価のあるもの

決算期末日の市場価格等に基づく時価法

(評価差額は全部純資産直入法により処理し、売却原価は移動平均法により算定)

時価のないもの

移動平均法による原価法

(2) デリバティブ

時価法

(3) たな卸資産

個別法による原価法

(貸借対照表価額は収益性の低下に基づく簿価切下げの方法により算定)

2. 固定資産の減価償却の方法

(1) 有形固定資産 (リース資産を除く)

主として定率法

ただし、平成28年4月1日以降に取得した建物附属設備及び構築物については定額法

(2) 自社利用のソフトウェア

社内における利用可能期間(5年)に基づく定額法

(3) 上記以外の無形固定資産 (リース資産を除く)

定額法

(4) リース資産

所有権移転外ファイナンス・リース

リース期間を耐用年数とし、残存価額を零とする定額法

(5) 長期前払費用

期限内均等償却法

3. 引当金の計上基準

(1) 貸倒引当金

債権の貸倒れに備えるため、一般債権については貸倒実績率により、貸倒懸念債権等については個別に回収可能性を勘案し、回収不能見込額を計上しております。

(2) 賞与引当金

従業員に対して支給する賞与の支出に充てるため、支給見込額の当事業年度負担額を計上しております。

(3) 役員賞与引当金

役員に対して支給する賞与の支出に充てるため、支給見込額の当事業年度負担額を計上しております。

4. 外貨建の資産及び負債の本邦通貨への換算基準

外貨建金銭債権債務は、決算日の直物為替相場により円貨に換算し、換算差額は損益として処理しております。

5. その他財務諸表作成のための基本となる重要な事項

(1) ヘッジ会計の方法

①ヘッジ会計の方法

繰延ヘッジ処理

なお、金利スワップの特例処理の要件を満たすものについては、当該処理を採用しております。

②ヘッジ手段とヘッジ対象

ヘッジ手段	金利スワップ
ヘッジ対象	借入金

③ヘッジ方針

負債に係る金利変動リスクを回避するためにデリバティブ取引を利用しております。なお、投機目的によるデリバティブ取引は行わない方針であります。

④ヘッジ有効性評価の方法

ヘッジ開始時から有効性判定時点までの期間において、ヘッジ対象の相場変動またはキャッシュ・フロー変動とヘッジ手段の相場変動またはキャッシュ・フロー変動との累計を比較し、両者の変動額等を基礎にして判定しております。ただし特例処理の要件を満たしている金利スワップについては、その判定をもって有効性評価の判定に代えております。

(2) 消費税等の会計処理方法

税抜方式によっております。ただし、資産に係る控除対象外消費税等は、発生事業年度の期間費用として処理しております。

(3) 連結納税制度の適用

連結納税制度を適用しております。

(貸借対照表関係)

※1. 担保に供している資産及び担保に係る債務

担保に供している資産は、次のとおりであります。

	前事業年度 (平成29年3月31日)	当事業年度 (平成30年3月31日)
販売用不動産	12,873百万円	12,246百万円
仕掛販売用不動産	19,234	14,982
前渡金	27	37
計	32,135	27,266

担保付債務は、次のとおりであります。

	前事業年度 (平成29年3月31日)	当事業年度 (平成30年3月31日)
1年内返済予定の長期借入金	5,163百万円	1,466百万円
長期借入金	17,834	19,045
計	22,997	20,511

※ 2. 不動産特定共同事業（匿名組合方式）の対象不動産等

不動産特定共同事業出資受入金は、不動産特定共同事業法第2条第3項第2号に定める契約（匿名組合契約）に基づく投資家からの出資受入金であります。当社は当該出資受入金により対象不動産等を取得し、運用後の収益を投資家に分配するものであり、その対象不動産等は次のとおりであります。

	前事業年度 (平成29年3月31日)	当事業年度 (平成30年3月31日)
販売用不動産	6,429百万円	7,229百万円

※ 3. 関係会社に対する金銭債権及び金銭債務（区分表示したものを除く）

関係会社に対する金銭債権及び金銭債務の金額は次のとおりであります。

	前事業年度 (平成29年3月31日)	当事業年度 (平成30年3月31日)
短期金銭債権	751百万円	1,903百万円
長期金銭債権	8	—
短期金銭債務	285	357
長期金銭債務	2	1

4. 保証債務

次の顧客等について、金融機関からの借入等に対し保証を行っております。

	前事業年度 (平成29年3月31日)	当事業年度 (平成30年3月31日)
住宅ローン利用顧客	8,165百万円	5,382百万円
CA Finance Pty Ltd	1,940	1,763
計	10,105	7,145

(損益計算書関係)

※ 1. 関係会社との営業取引及び営業取引以外の取引の取引高の総額

関係会社との取引は、次のとおりであります。

	前事業年度 (自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日)	当事業年度 (自 平成29年4月1日 至 平成30年3月31日)
営業取引（収入分）	107百万円	54百万円
営業取引（支出分）	1,137	841
営業取引以外の取引（収入分）	108	116
営業取引以外の取引（支出分）	63	66

※ 2. 販売費に関する費用のおおよその割合は前事業年度57%、当事業年度53%、一般管理費に属する費用のおおよその割合は前事業年度43%、当事業年度47%であります。

販売費及び一般管理費のうち主要な費目及び金額は次のとおりであります。

	前事業年度 (自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日)	当事業年度 (自 平成29年4月1日 至 平成30年3月31日)
販売促進費	2,422百万円	2,134百万円
人件費	2,892	3,073
賞与引当金繰入額	350	530
役員賞与引当金繰入額	24	56
支払手数料	1,104	1,047
減価償却費	62	52

※3. 固定資産除却損の内容は、次のとおりであります。

	前事業年度 (自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日)	当事業年度 (自 平成29年4月1日 至 平成30年3月31日)
建物	15百万円	6百万円
工具、器具及び備品	4	1
ソフトウェア	18	2
計	38	10

(有価証券関係)

前事業年度（平成29年3月31日）

子会社株式及び関連会社株式（貸借対照表計上額 子会社株式2,484百万円、関連会社株式205百万円）は、市場価格がなく、時価を把握することが極めて困難と認められることから、記載しておりません。

当事業年度（平成30年3月31日）

子会社株式及び関連会社株式（貸借対照表計上額 子会社株式2,582百万円、関連会社株式205百万円）は、市場価格がなく、時価を把握することが極めて困難と認められることから、記載しておりません。

(税効果会計関係)

1. 繰延税金資産及び繰延税金負債の発生の主な原因別の内訳

	前事業年度 (平成29年3月31日)	当事業年度 (平成30年3月31日)
繰延税金資産	(百万円)	(百万円)
税務上の繰越欠損金	22,665	12,708
貸倒引当金損金算入限度超過額	11	11
賞与引当金	130	201
販売用不動産評価損	1,279	1,327
その他	2,504	2,491
繰延税金資産小計	26,590	16,740
評価性引当額	△24,629	△14,701
繰延税金資産合計	1,960	2,039

2. 法定実効税率と税効果会計適用後の法人税等の負担率との間に重要な差異があるときの、当該差異の原因となった主要な項目別の内訳

	前事業年度 (平成29年3月31日)	当事業年度 (平成30年3月31日)
	(%)	(%)
法定実効税率	30.9	30.9
(調整)		
交際費等永久に損金に算入されない項目	1.1	0.9
受取配当金等永久に益金算入されない項目	△1.0	△0.8
評価性引当額の増減額	△20.0	△17.2
住民税均等割	0.4	0.2
法人税額の特別控除	△0.9	△0.9
その他	△1.0	0.1
税効果会計適用後の法人税等の負担率	9.4	13.2

(企業結合等関係)

該当事項はありません。

(重要な後発事象)

該当事項はありません。

④【附属明細表】

【有形固定資産等明細表】

(単位：百万円)

区分	資産の種類	当期首残高	当期増加額	当期減少額	当期償却額	当期末残高	減価償却 累計額
有形 固定資産	建物	104	22	6	9	111	98
	工具、器具及び備品	82	121	1	26	174	156
	土地	8	—	—	—	8	—
	リース資産	3	—	—	1	2	0
	計	199	143	7	37	297	255
無形 固定資産	商標権	7	3	—	1	10	6
	ソフトウェア	54	22	2	20	54	178
	その他	40	—	—	0	40	1
	計	102	26	2	22	104	185

【引当金明細表】

(単位：百万円)

科目	当期首残高	当期増加額	当期減少額	当期末残高
貸倒引当金	37	1	0	38
賞与引当金	421	656	421	656
役員賞与引当金	24	56	24	56

(2)【主な資産及び負債の内容】

連結財務諸表を作成しているため、記載を省略しております。

(3)【その他】

該当事項はありません。

第6【提出会社の株式事務の概要】

事業年度	4月1日から3月31日まで
定時株主総会	6月中
基準日	3月31日
剰余金の配当の基準日	9月30日 3月31日
1単元の株式数	100株
単元未満株式の買取り	
取扱場所	(特別口座) 東京都千代田区丸の内一丁目4番5号 三菱UFJ信託銀行株式会社証券代行部
株主名簿管理人	(特別口座) 東京都千代田区丸の内一丁目4番5号 三菱UFJ信託銀行株式会社
取次所	_____
買取手数料	無料
公告掲載方法	電子公告により行う。但し、事故その他やむを得ない事由により電子公告によることができないときは、日本経済新聞に掲載する。 公告掲載URL https://www.cigr.co.jp/irinfo/legal/index.html
株主に対する特典	該当事項はありません。

(注) 当社定款の定めにより、単元未満株主は、会社法第189条第2項各号に掲げる権利、会社法第166条第1項の規定による請求をする権利並びに株主の有する株式数に応じて募集株式の割当て及び募集新株予約権の割当てを受ける権利以外の権利を有しておりません。

第7【提出会社の参考情報】

1【提出会社の親会社等の情報】

当社は、金融商品取引法第24条の7第1項に規定する親会社等はありません。

2【その他の参考情報】

当事業年度の開始日から有価証券報告書提出日までの間に、次の書類を提出しております。

（1）有価証券報告書及びその添付書類並びに確認書

事業年度（第48期）（自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日）平成29年6月23日関東財務局長に提出

（2）内部統制報告書及びその添付書類

平成29年6月23日関東財務局長に提出

（3）四半期報告書及び確認書

（第49期第1四半期）（自 平成29年4月1日 至 平成29年6月30日）平成29年8月9日関東財務局長に提出

（第49期第2四半期）（自 平成29年7月1日 至 平成29年9月30日）平成29年11月10日関東財務局長に提出

（第49期第3四半期）（自 平成29年10月1日 至 平成29年12月31日）平成30年2月13日関東財務局長に提出

（4）臨時報告書

平成29年6月26日関東財務局長に提出

企業内容等の開示に関する内閣府令第19条第2項第9号の2（株主総会における議決権行使の結果）に基づく臨時報告書であります。

第二部【提出会社の保証会社等の情報】

該当事項はありません。

独立監査人の監査報告書及び内部統制監査報告書

平成30年6月20日

株式会社コスモスイニシア

取締役会 御中

有限責任監査法人トーマツ

指定有限責任社員 業務執行社員	公認会計士	岡 本 健一郎	印
指定有限責任社員 業務執行社員	公認会計士	高 見 勝 文	印

＜財務諸表監査＞

当監査法人は、金融商品取引法第193条の2第1項の規定に基づく監査証明を行うため、「経理の状況」に掲げられている株式会社コスモスイニシアの平成29年4月1日から平成30年3月31日までの連結会計年度の連結財務諸表、すなわち、連結貸借対照表、連結損益計算書、連結包括利益計算書、連結株主資本等変動計算書、連結キャッシュ・フロー計算書、連結財務諸表作成のための基本となる重要な事項、その他の注記及び連結附属明細表について監査を行った。

連結財務諸表に対する経営者の責任

経営者の責任は、我が国において一般に公正妥当と認められる企業会計の基準に準拠して連結財務諸表を作成し適正に表示することにある。これには、不正又は誤謬による重要な虚偽表示のない連結財務諸表を作成し適正に表示するために経営者が必要と判断した内部統制を整備及び運用することが含まれる。

監査人の責任

当監査法人の責任は、当監査法人が実施した監査に基づいて、独立の立場から連結財務諸表に対する意見を表明することにある。当監査法人は、我が国において一般に公正妥当と認められる監査の基準に準拠して監査を行った。監査の基準は、当監査法人に連結財務諸表に重要な虚偽表示がないかどうかについて合理的な保証を得るために、監査計画を策定し、これに基づき監査を実施することを求めている。

監査においては、連結財務諸表の金額及び開示について監査証拠を入手するための手続が実施される。監査手続は、当監査法人の判断により、不正又は誤謬による連結財務諸表の重要な虚偽表示のリスクの評価に基づいて選択及び適用される。財務諸表監査の目的は、内部統制の有効性について意見表明するためのものではないが、当監査法人は、リスク評価の実施に際して、状況に応じた適切な監査手続を立案するために、連結財務諸表の作成と適正な表示に関連する内部統制を検討する。また、監査には、経営者が採用した会計方針及びその適用方法並びに経営者によって行われた見積りの評価も含め全体としての連結財務諸表の表示を検討することが含まれる。

当監査法人は、意見表明の基礎となる十分かつ適切な監査証拠を入手したと判断している。

監査意見

当監査法人は、上記の連結財務諸表が、我が国において一般に公正妥当と認められる企業会計の基準に準拠して、株式会社コスモスイニシア及び連結子会社の平成30年3月31日現在の財政状態並びに同日をもって終了する連結会計年度の経営成績及びキャッシュ・フローの状況をすべての重要な点において適正に表示しているものと認める。

<内部統制監査>

当監査法人は、金融商品取引法第193条の2第2項の規定に基づく監査証明を行うため、株式会社コスモスイニシアの平成30年3月31日現在の内部統制報告書について監査を行った。

内部統制報告書に対する経営者の責任

経営者の責任は、財務報告に係る内部統制を整備及び運用し、我が国において一般に公正妥当と認められる財務報告に係る内部統制の評価の基準に準拠して内部統制報告書を作成し適正に表示することにある。

なお、財務報告に係る内部統制により財務報告の虚偽の記載を完全には防止又は発見することができない可能性がある。

監査人の責任

当監査法人の責任は、当監査法人が実施した内部統制監査に基づいて、独立の立場から内部統制報告書に対する意見を表明することにある。当監査法人は、我が国において一般に公正妥当と認められる財務報告に係る内部統制の監査の基準に準拠して内部統制監査を行った。財務報告に係る内部統制の監査の基準は、当監査法人に内部統制報告書に重要な虚偽表示がないかどうかについて合理的な保証を得るために、監査計画を策定し、これに基づき内部統制監査を実施することを求めている。

内部統制監査においては、内部統制報告書における財務報告に係る内部統制の評価結果について監査証拠を入手するための手続が実施される。内部統制監査の監査手続は、当監査法人の判断により、財務報告の信頼性に及ぼす影響の重要性に基づいて選択及び適用される。また、内部統制監査には、財務報告に係る内部統制の評価範囲、評価手続及び評価結果について経営者が行った記載を含め、全体としての内部統制報告書の表示を検討することが含まれる。

当監査法人は、意見表明の基礎となる十分かつ適切な監査証拠を入手したと判断している。

監査意見

当監査法人は、株式会社コスモスイニシアが平成30年3月31日現在の財務報告に係る内部統制は有効であると表示した上記の内部統制報告書が、我が国において一般に公正妥当と認められる財務報告に係る内部統制の評価の基準に準拠して、財務報告に係る内部統制の評価結果について、すべての重要な点において適正に表示しているものと認める。

利害関係

会社と当監査法人又は業務執行社員との間には、公認会計士法の規定により記載すべき利害関係はない。

以 上

(注) 1. 上記は、監査報告書の原本に記載された事項を電子化したものであり、その原本は当社（有価証券報告書提出会社）が別途保管しております。

2. X B R L データは監査の対象には含まれていません。

独立監査人の監査報告書

平成30年6月20日

株式会社コスモスイニシア

取締役会 御中

有限責任監査法人トーマツ

指定有限責任社員 業務執行社員	公認会計士	岡 本 健一郎	印
指定有限責任社員 業務執行社員	公認会計士	高 見 勝 文	印

当監査法人は、金融商品取引法第193条の2第1項の規定に基づく監査証明を行うため、「経理の状況」に掲げられている株式会社コスモスイニシアの平成29年4月1日から平成30年3月31日までの第49期事業年度の財務諸表、すなわち、貸借対照表、損益計算書、株主資本等変動計算書、重要な会計方針、その他の注記及び附属明細表について監査を行った。

財務諸表に対する経営者の責任

経営者の責任は、我が国において一般に公正妥当と認められる企業会計の基準に準拠して財務諸表を作成し適正に表示することにある。これには、不正又は誤謬による重要な虚偽表示のない財務諸表を作成し適正に表示するために経営者が必要と判断した内部統制を整備及び運用することが含まれる。

監査人の責任

当監査法人の責任は、当監査法人が実施した監査に基づいて、独立の立場から財務諸表に対する意見を表明することにある。当監査法人は、我が国において一般に公正妥当と認められる監査の基準に準拠して監査を行った。監査の基準は、当監査法人に財務諸表に重要な虚偽表示がないかどうかについて合理的な保証を得るために、監査計画を策定し、これに基づき監査を実施することを求めている。

監査においては、財務諸表の金額及び開示について監査証拠を入手するための手続が実施される。監査手続は、当監査法人の判断により、不正又は誤謬による財務諸表の重要な虚偽表示のリスクの評価に基づいて選択及び適用される。財務諸表監査の目的は、内部統制の有効性について意見表明するためのものではないが、当監査法人は、リスク評価の実施に際して、状況に応じた適切な監査手続を立案するために、財務諸表の作成と適正な表示に関連する内部統制を検討する。また、監査には、経営者が採用した会計方針及びその適用方法並びに経営者によって行われた見積りの評価も含め全体としての財務諸表の表示を検討することが含まれる。

当監査法人は、意見表明の基礎となる十分かつ適切な監査証拠を入手したと判断している。

監査意見

当監査法人は、上記の財務諸表が、我が国において一般に公正妥当と認められる企業会計の基準に準拠して、株式会社コスモスイニシアの平成30年3月31日現在の財政状態及び同日をもって終了する事業年度の経営成績をすべての重要な点において適正に表示しているものと認める。

利害関係

会社と当監査法人又は業務執行社員との間には、公認会計士法の規定により記載すべき利害関係はない。

以 上

(注) 1. 上記は、監査報告書の原本に記載された事項を電子化したものであり、その原本は当社（有価証券報告書提出会社）が別途保管しております。

2. X B R L データは監査の対象には含まれていません。

【表紙】

【提出書類】	確認書
【根拠条文】	金融商品取引法第24条の4の2第1項
【提出先】	関東財務局長
【提出日】	平成30年6月22日
【会社名】	株式会社コスモスイニシア
【英訳名】	COSMOS INITIA Co.,Ltd.
【代表者の役職氏名】	代表取締役社長 高木 嘉幸
【最高財務責任者の役職氏名】	該当事項はありません。
【本店の所在の場所】	東京都港区芝五丁目34番6号
【縦覧に供する場所】	株式会社東京証券取引所 (東京都中央区日本橋兜町2番1号) 株式会社コスモスイニシア西日本支社 (大阪市北区中崎西二丁目4番12号)

1 【有価証券報告書の記載内容の適正性に関する事項】

当社代表取締役社長高木嘉幸は、当社の第49期（自 平成29年4月1日 至 平成30年3月31日）の有価証券報告書の記載内容が金融商品取引法令に基づき適正に記載されていることを確認しました。

2 【特記事項】

特記すべき事項はありません。

【表紙】

【提出書類】	内部統制報告書
【根拠条文】	金融商品取引法第24条の4の4第1項
【提出先】	関東財務局長
【提出日】	平成30年6月22日
【会社名】	株式会社コスモスイニシア
【英訳名】	COSMOS INITIA Co., Ltd.
【代表者の役職氏名】	代表取締役社長 高木 嘉幸
【最高財務責任者の役職氏名】	該当事項はありません。
【本店の所在の場所】	東京都港区芝五丁目34番6号
【縦覧に供する場所】	株式会社東京証券取引所 (東京都中央区日本橋兜町2番1号) 株式会社コスモスイニシア西日本支社 (大阪市北区中崎西二丁目4番12号)

1 【財務報告に係る内部統制の基本的枠組みに関する事項】

当社代表取締役社長高木嘉幸は、当社グループ(当社並びに連結子会社及び持分法適用関連会社)の財務報告に係る内部統制の整備及び運用に責任を有しており、企業会計審議会の公表した「財務報告に係る内部統制の評価及び監査の基準並びに財務報告に係る内部統制の評価及び監査に関する実施基準の設定について（意見書）」に示されている内部統制の基本的枠組みに準拠して財務報告に係る内部統制を整備及び運用しております。

なお、内部統制は、内部統制の各基本的要素が有機的に結びつき、一体となって機能することで、その目的を合理的な範囲で達成しようとするものであり、このため、財務報告に係る内部統制により財務報告の虚偽の記載を完全には防止又は発見することができない可能性があります。

2 【評価の範囲、基準日及び評価手続に関する事項】

当社グループの財務報告に係る内部統制の評価は、当事業年度の末日である平成30年3月31日を基準日として行われており、評価に当たっては、一般に公正妥当と認められる財務報告に係る内部統制の評価の基準に準拠いたしました。

本評価においては、連結ベースでの財務報告全体に重要な影響を及ぼす内部統制（全社的な内部統制）の評価を行った上で、その結果を踏まえて、評価対象とする業務プロセスを選定しております。当該業務プロセスの評価においては、選定された業務プロセスを分析した上で、財務報告の信頼性に重要な影響を及ぼす統制上の要点を識別し、当該統制上の要点について整備及び運用状況の評価することによって、内部統制の有効性に関する評価をいたしました。

財務報告に係る内部統制の評価の範囲は、財務報告の信頼性に及ぼす影響の重要性の観点から必要な範囲を決定いたしました。財務報告の信頼性に及ぼす影響の重要性は、金額的及び質的影響の重要性を考慮して決定しており、当社及び連結子会社1社を対象として行った全社的な内部統制の評価結果を踏まえ、業務プロセスに係る内部統制の評価範囲を合理的に決定いたしました。なお、連結子会社10社及び持分法適用関連会社1社については、金額的及び質的重要性の観点から僅少であると判断し、全社的な内部統制の評価範囲に含めておりません。

業務プロセスに係る内部統制の評価範囲については、各事業拠点の当連結会計年度の売上高（連結会社間取引消去後）の金額が高い拠点から合算していき、当連結会計年度の連結売上高の概ね2／3に達している事業拠点を「重要な事業拠点」といたしました。選定した重要な事業拠点においては、当社グループの事業目的に大きく関わる勘定科目として、「売上高」「売掛金」「たな卸資産」に至る業務プロセスを評価の対象といたしました。なお、選定した重要な事業拠点における重要な事業又は業務との関連性が低く、財務報告に対する影響の重要性も僅少であると判断した業務プロセスについては、評価対象とはしておりません。さらに、選定した重要な事業拠点にかかわらず、それ以外の事業拠点をも含めた範囲について、重要な虚偽記載の発生可能性が高く、見積りや予測を伴う重要な勘定科目に係る業務プロセスやリスクが大きい取引を行っている事業又は業務に係る業務プロセスを財務報告への影響を勘案して重要性の大きい業務プロセスとして評価対象に追加しております。

3 【評価結果に関する事項】

上記の評価の結果、平成30年3月31日現在において、当社グループの財務報告に係る内部統制は有効であると判断いたしました。

4 【付記事項】

付記すべき事項はありません。

5 【特記事項】

特記すべき事項はありません。